月刊

駒場唯一のコミュニティマガジン

恒河沙

特集 駒場祭 新たなる創造の場をめざして

☆落書き

NO. 7

巻頭言

キャンパスは秋――いつのまにかやってきたという感じです。あなたにとって秋はどんな季節ですか？

夏を生命力ほとばしる活動の季節とすれば、さしずめ秋は観相の季節でしょうか。
自然が私たちを罰することに飽き、やさしく振るまう秋。そのやさしさの中で、すべての事物がその本然を開陳する、そんな感じがします。
ほら、銀杏並木も、行き交う人々も、何だか新しく見えてきませんか。

でもあなたは言うかもしれません――淋しさが胸にこたえるんだ、この頃。アベックが歩いているのを見たりすると……秋ってそんな季節じゃない……？

確かに自分が見えてくるのですね。だけど、このキャンパスをごらんなさい。何といっても新学期なのです。それに年に一度のお祭りも近づいてきたことだし。
とにかくここで自分の秋をつくってみませんか。淋しくも、楽しくも、自分の秋なのだから……。

目次

巻頭言 ―― 1

特集 駒場祭 新たなる創造の場をめざして ―― 4

私のコマバサイ 中村啓二郎／大学祭を憂う 憂志
COMMUNICATION BREAK DOWN 太田裕美／学園祭雑考 高久充
企画から 『子供のおもちゃ』 駒場子供会
KFC日記 朝比奈美芽
核が欲しい 公卿思寿（編集部）
クラス企画の16年 編集部

落書き ―― 27

現代落書考 東落評掻くめえ左派委員長 ―― 33

コラム 時代錯誤家 ―― 24

お断り：今回「今、再び東大を問う」「人物クローズアップ」はお休みします。

しょおとしょと パラレルワールド 宇野はるか ―― 16
創作 ある対話 コンポラ＝フォト ―― 19
散文詩 愚者の夜 原口一博 ―― 23
JOHDAN 毛沢山 ―― 26
テニスを考えるその1 村磯金得 ―― 32
ぼくは日大生 高橋晋 ―― 35
地味なようで派手だと思う陳斗鉉さんを救う会に参加してきて 林潤一 ―― 36
『女子大生』という言葉にあなたは何を感じるか 堂前標 ―― 40
「和」と日本社会 杉田敦 ―― 44
新幹線車内販売体験記その1 夢野佐理葦 ―― 47
BOOK REVIEW 51·52
奇怪クロスワードパズル 53
クロスワードパズル解答用紙 55·56

駒場祭

特集

新たなる創造の場をめざして

秋休みも終り，いよいよ駒場祭を迎える季節となった。クラスやサークルの準備も進んでいることだろう。今年も企画数は増加し史上最大の規模だというが，数だけふえればいいというものではない。質の低下はかねてからうんぬんされてはきたが，現状を単に「低俗」「バカさわぎのみ」などと評論家的にきめつけてみたところで何にもならないだろう。大なり小なり自らがかかわり創り上げていく立場から駒祭を問い直し自らの中に位置づけていかなければならないだろう。この駒祭に幾つかの視点からスポットをあててみた。

私のコマバサイ

中村啓二郎

今年もまた駒場祭の季節がやってきた。去年と同じように、今年も数多くの企画が立てられている。また駒場キャンパスが人で一杯になることだろう。しかし、そこで行なわれる企画の質には問題はないのだろうか。

大学祭には、2つの側面があると私は思う。一つは、いうまでもなく「祭り」としての側面である。年に一回、いろいろ趣向をこらして楽しもう、ということには私も何ら文句はない。私も大いに楽しみたい。しかし、もう一つの側面があると思う。それは、数少い学生の自己主張の場としての側面である。今はよく「モラトリアム」ということがいわれる。学生は、社会人予備軍として、いわばぬるま湯につかっているということである。でも私は、学生は「モラトリアム」という言葉に甘えていてはいけないのではないかと思う。私たちは、皆18才以上、満20才になって選挙権を取得している者も多い。運悪く家庭に恵まれていなければ、私たちは今頃は、それ相応の責任をもって働いていたはずなのだ。だからこそ、私たちも、世の中の動きに、数々の社会問題に、目を向け、学生の立場で、それなりの意見を組み立て、世にアピールする責任があると、私は思う。もちろん、以上のようなことは、駒場祭の時だけ、考えればよい、というものではない。私たちは常にそういう問題意識はもっていなければならない。しかし、現実問題として、その問題を掘り下げて、じっくり考えてみる機会は、なかなか得がたい。（時に各サークルに属していない、あるいは、運動系サークルで活動している学生は特にそうであろう）駒場祭はそういう意味で貴重な機会だと思うのである。

以上のようなこと考えた私は、去年（一年のとき）クラスの研究発表に参加した。もっとも、世にアピールしよう、などと大それたことは考えなかった。せいぜい、見にくる学生たちをハッとさせてやろう、くらいの意識であった。内容は教育問題にしよう、ということになり、夜間中学の問題を特にとりあげることにした。夜間中学の問題を特にとりあげることにした。夜間中学とは、何らかの理由（貧困、戦争の影響、昼間の中学にどうしてもなじめなかった等々）で、義務教育をうけられなかった人たちのために、夜間に開設されている中学である。といっても、別に特別な校舎があるのではなく、高校の定時制と同じように、普通の公立中学の校舎を夕方から使用するのである。東京には約10校ほどある。その中で私たちは、荒川区立九中へ通って、夜間中学の実態を調べさせてもらうことにしたのである。活動を本格的に開始したのが、秋やすみ、それから駒場祭まで、のべ20回近く通ったと思う。その過程で、私たちは、「人をハッとさせる」以前に、自分たちが、ガーンとなってしまったのである。夜間中学の生徒さんは、年も60才ちかい人から15才まで、各人の環境もバラバラである。朝鮮系の人も、中国系の人もいた。私たちは、その人たちの話を聞いて、今の日本に、義務教育を、うけられなかった人がいるという事実に、さらに各人のきびしい生活状態にまず衝撃をうけ、次に、そうしたことを知らなかった自分の無知を恥じた。仮にも、世間では、一番すぐれている（何がすぐれているのかはよくわからないが）といわれている東大の学生であるはずなのに、自分は実は何も知らなかったという、何ともいえないショックであった。さらに、そこで行なわれている教育は、我々が受けてきた教育とは、根本的に違う。そこでは、上級学校へいかに進ませるかが問題になっているのではなく、各人に、いかに理解させるかが、目的となっている。先生方も、我々が、小中高と接してきた教師とは、どうも違うように思えた。その献身的努力、情熱。私たちは、人間観、人生観を根本的にゆすぶられざるを得なかった。

私について言えば、人間観が、全く変った。もし、私が去年研究発表に参加しなければ、今ごろ、下宿のフトンの中で、イジイジと、しようもないことを考えて、ドツボに陥っていたことだろう。（この文は、低俗かつ口語的すぎる表現ですので、一部の方は理解できないかもしれませんが、直観的に私の言わんとするところを把握していただきたい。）去年の駒場祭は、私にとっては、革命的転回点になったのである。友人関係、その他の対人関係も非常にうまく行くようになった。（大げさと思う人がいるかもしれないが、これは本当）さらに職業についても、本当に考えさせられた。今は、自分なりの答えを見つけたが、当時は非常に苦しんだ。しかし、苦しんだからこそ、私は、一回り成長できたのだし、実に得がたい経験ができたと喜んでいる。

最初書いたことと話がずれたが、私は、最初述べたことを否定するわけではない。もちろんそれは重要な一側面である。しかし、そうした対外的な面ばかりでなく、対内的に、自分自身についても大きな自己革新ができたという点が言いたかったのである。東大、東大といわれても、我々自身はいかに無知であるか、いかに限られた情報の中で暮しているか、それは東大の中だけにいてはわからない。我々は皆、もっともっと世の中へキャンパスから出ていかねばならないのではなかろうか。東大の中だけで暮し、東大の中で得られる知識だけで満足し、社会に出ていくならば、それは、犯罪的といってもよいのではないだろうかと思う。しかし、一人では、こうしたことをするのはむずかしいし、普段は機会がないというのが事実だろう。だからこそ、こうした学園祭の場合などを、とくに積極的に利用していく必要があると、私は思うのである。

私は今年も、仲間とグループを組み、研究発表をするつもりである。すでに活動も軌道にのりつつある。今年もまた、新たな自己革新をめざしたい。そして、「見にくる学生」も、大いにハッとさせ

られるような研究発表にしたいと思っている。（53L Ⅱ）

大学祭を憂う

憂志

大学祭の堕落が唱えられ始めてから、すでに久しい。学生に委ねられた文化活動の砦が、今や喧噪と騒擾の場と化してしまった。駒場祭が近づくにつれ、大学祭を憂う気持ちが強まってくる。以下、私の舌足らずのアピールを嚆ってみる。

まず、第一に、クラブ・サークルの資金かせぎの為の模擬店・喫茶店の全面禁止を訴える。大学祭が部費かせぎに利用されるなど、言語道断である。そんな企画がある限り、どんな美辞麗句を並べても、大学祭の意義はぼやけてしまう。五月祭のとき、部費かせぎのための喫茶店を企画していた某先輩に、大学祭で、こんなことをやっていいと思っているのか、と質問したところ、次のような解答が返ってきた。

「いやあ、喫茶店で一緒に働いていると、部員同士の結束が固まるもんだよ。」

主客転倒、甚しいというか、あきれてモノが言えなかった。部員の結束を固めるために、大学祭を『喧噪と騒擾の場』に売り渡すことに抵抗がないのだろうか。部員の結束を固めるのに、喫茶店を企画する程度の発想しかできないのだろうか。呆れるばかりである。部費かせぎぐらい、『文化活動の砦』をくずさずとも、学外でいくらでもできるだろう。模擬店・喫茶店は、来客のために必要最小限にとどめ、それも委員会企画として、収益を駒場祭運営費にあてるなり、チャリティーにまわすなりするのはどうだろう。真剣に考えてもらいたい問題である。もっとも同人誌販売や、映画・演劇のカンパは上のコメントから外れるものと考える。

第二に参加者は『甘え』をなくすべきである。ある企画を担当している友人がこんなことを言っていた。

「駒祭の意義を考えるとき、お客さんを楽しませるとか、あるいは企画の成果とかはたいした問題じゃない。参加者がひとつになって一生けん命やれば、それでいいんだ。」

高校生並みの発想と言わざるを得ない。少なくとも準備段階でロにするべき言葉ではない。映画にしろ同人誌にしろ研究発表にしろ、専門家の目にも秀れたものと映るものをめざさなくてはならないと考える。また結果としてそうならなければ、ほんとうの駒場祭の意義は達成できないのではないか。「みんなで一緒に」云々とか、「我々のエネルギーだけは認めてほしい」といった発想は、高校で卒業してもらいたいものだ。また、「真面目な」企画であるから、お客さんが少なくても仕方がない、というのもひとつの『甘え』である。真面目さと面白さは決して反比例するものではないはずだ。真面目で且つ面白い、しかもレヴェルの高い企画をめざす態度が望まれる。

その他、委員会の「二項目署名」に対するコメントや、C・C代に対する批判なども加えたいが、それは別の機会に譲るとして、今後は私の参加している展示企画における論文に全精力を傾けようと思う。以上のアッピールにあたらない秀れた企画も幾つかあるだろう。それらの成果を期待するとともに、駒場祭を『文化活動の砦』として、『喧噪と騒擾』の場から守ろう。ともう一度訴え、筆をおく。

COMMUNICATION BREAK DOWN

太田 裕美

私が考えるところ、駒場祭において可能なコミュニケーションの

形態は少なくとも2つはあります。

第一。どんな企画でもよいのですが、一つの目標に向かって作業を共にするという事から連帯感が生まれてきます。同じクラスやサークルの中にいても話をしなかった人とも話をする機会もできますし、また既に友人となっている者に対しても新しい発見ができます。例えば、A君にはこんな文学的才能があったのだとか、B君はこんなにメカに強いのかとか。また、仕事に追いこまれた時にとる態度が人それぞれにちがうのを見るのもけっこう面白いものです。このようなコミュニケーションは中学や高校の時にも体験したと思います。しかし、大学生として、しかもマンモス化している大学の大学生にとってもっと意義深いコミュニケーションがあります。

第二。我々は各々日頃いろいろな事を考えます。もしその考えている事を口に出させて議論させたとしたら、ものすごい百家争鳴となるでしょう。我大学には無許可でシンポ、討論会、研究発表などを行なえる大きな施設はありません。そういう点で駒場祭は普段は教室として使われている空間が三日間も我々の意見の自由な発表の場となるわけですから、コミュニケーションの輪を広げる絶好の機会といえるでしょう。

しかし問題もあります。企画数が多いため、一つの企画あたりのスペースが狭くなり、時間が短かくなるという事です。これでは満足のいく発表形態は望めません。

様々な企画のうちには、本当に私はこれを主張したいのだという意志に基づいているものもありましょうし、クラスまたはサークルとして何かをやらなければ面子がたたないからとか、何かやった方がいいからとか、別にやることもないから×××をやろうとかいうのもあるでしょう。私としては後者の方には遠慮していただきたいのです。とは言っても別にシンポ、研究発表などのいわゆる真面目、硬派路線をとれといっているのではありません。日常我々が考えていることがテーマとなり、それを十分にたたき出せればそれでいいと思います。例えば、日頃恋愛問題で悩んでいる者がそれをテーマにして映画を製作するなり演劇にするなりするのもよいでしょう。種類を問わず楽器を毎日のように練習している者がコンサートを開くのもよいでしょう。しかし、駒場祭のためにテーマを設けてそれを煮詰めて発表するのもよいでしょうが理想とはいえません。要するに、普段考えている事を主体的に、積極的に自分自身の意見として外に出す事が、今の大学生活には必要だと思います。それには駒場祭は本当によい機会だと思います。

（あとがき）第一と第二のコミュニケーションの間にはある程度の矛盾がありますが、心ある恒河沙の読者諸君には私のいいたいことが理解いただけたと思います。　おはり（79 L E）

学園祭雑考 ―三田祭をタネにして―

高久　充

学園祭について何か書いてくれと頼まれた時、僕の心には何の印象も浮ばなかった。去年の僕の大学の学園祭に関しては、家に帰り、原稿用紙を前にした時、ふと学園祭のパンフレットの存在を思い出す。ページをくってみると、去年の学園祭のテーマが目に飛びこんでくる。「翼をなくした鳥たちは堕ちてゆくしかないのだろうか」サブタイトルとして、「曖昧な挫折感の中に安住する自己からの脱却」と書いてある。さらにページをくっていくと、色々な企画、催物、展示が続いていく。どれも、すごく内容があり、面白そうなことが書いてある。このパンフレットを見る限りでは、大いに期待が持てそうに思え、未知のジャングルに足を踏み入れる前の空想を刺激されて胸が踊っているような心持になる。しかしながら、今振り返ってみて、何を感じるであろうか。僕の中にはただ索漠たる空間

が横たわっていたという思いしかない。何か火の消えたような、よそよそしいイメージが付きまとう。それに、これらの内容が、テーマとどのようにして結びつくのであろうか。テーマはただのお題目にすぎないのであろうか。

そこで一つの疑問が浮んで来る。「何のために学園祭をやるのか」という疑問である。果して、何人このことを真剣に考えた人がいるであろう。おそらく大多数の人は、年中行事の一つとして、何の抵抗もなく受け入れてしまうのであろう（僕もその一人だ）。年中行事化した学園祭。ここに問題の一つの焦点があるようだ。というのも、学園祭というものが、創造の行なわれる場であるならば、年中行事化したということは、創造の力が失われてしまったことを意味するからである。創造は、常に日常の外で行われる。僕が感じた火の消えたような寂しさは、この創造の喪失から来ているのではないだろうか。であるから、創造的力の復活こそが、第一の急務ではないだろうか。なぜなら、「何のために学園祭をやるのか」という疑問の答えの一つは、「創造の快楽」だ。僕は思うからだ。だがこの「創造の快楽」には生みの苦しみが伴う。今の学園祭は、快楽の前にある苦しみを避けたために、創造の魅力が失われてしまったのだ。この創造の喪失は、僕たちの生き方そのものにも係っている。なぜなら、日常の外にふみ出せないでいるのは、現状に甘んじている自分自身の態度によるからだ。サブタイトルに書かれていた「曖昧な挫折感に安住する自己」とはまさにこのことであって、去年の僕らの学園祭は、結果としてこの安住の地を離れることはなかった。

次に、「創造の快楽」に絡くもう一つの答えについて考えてみよう。それは「参加」である。もちろん「参加」は目的そのものではなく、一つの手段であるが、「参加」を通して得るものも含めての意味で、ここでは「参加」という言葉を使う。「参加」には2種類ある。一つは、学園祭を行う側の「参加」であり、もう一つは、それを見る側の「参加」である。まず前者であるが、半分以上の学生は「参加」していない。学園祭は、大学が一週間休みになるという意義しか持っていないのである。もちろん、全員が「参加」した場合には、会場のスペースの問題など、色々な問題が起こってくるにちがいない。しかし、何らかの形でもよいから、全員が参加する学園祭を、考えてみる必要があるのではないだろうか。次に後者の「参加」であるが、これはもちろん、行なう側の態度によって、可ともなり、不可ともなる。去年の僕たちの学園祭について考えてみると、明らかに大半の出し物が、行なう側の一方的な押しつけで、見る側の「参加」が、無視されていた。学園祭が公開を原則としているからには、このようなことは許されないであろう。見る側の「参加」も考えた学園祭にすることが必要だと思う。

最後に、僕は去年のテーマの表現に反対する。僕たちはまだ翼をなくしていないと思う。ただ飛び方を知らないだけだ。これから飛び方を、僕らは、学ばなければならない。（慶応義塾大学 二年）

企画から

『子供のおもちゃ』

駒場子供会

KFCによれば、今年の企画数は昨年を上回り史上最高だという。みんなどんなことをどんなふうにやろうとしているのだろうか。その中から駒場子供会に書いて貰った。

第二グラウンドで野球をした事がある人は御存知でしょうが、あそこでエラーをすると悲惨なめに会います。臓腑をえぐるような鋭い罵声が、雨アラレと飛んで来るのです。その罵声の主はというと、そうなんです。我が駒場子供会に在籍するところのかわいらしい駒場小学校の児童なのであります。

この度、第三十回駒場祭において、我々駒場子供会では、さき程も言いましたかわいい児童ちゃんたちが自らのちいちゃなおててでちゅくりまちたおもちゃを発表する予定であります。題して「こどものおもちゃ」

ここで少し日本語の講義を致します。日本語の中でも難しいとされている助詞。その中でも特に難しい「の」についてであります。さて、文法は例文で覚えるのが近道であることは受験勉強のときにわかりましたね。では例文を出します。

こどものおもちゃ

おとなのおもちゃ

このニつの間には大きな違いがあります。後者の「の」は、――ガ使ッテ楽シム、という意でありまして、前者のは、――ガ使ッテ楽シ、あれ、同じですね。しかし、大きな違いがあることは確かなのです。そう、前者は――ガ作ッタ、という意であり、後者とは……やはり同じですね。ちょっと待った。ありましたよ。大きな相違点が。後者のは、――ニカ楽シメナイ、の意であり、前者のは、――ハ楽シメルシ、大人ダッテ楽シメル、の意なのであります。これで「の」の講義を終ります。

このように文学的な題をつけた駒場子供会とはいったいどんな集団なのだろうかと、まことに御尤もな疑問を抱く方も少いので、ここで説明をいたします。我々は、新入部員が欲しい為に論理的な矛盾を犯してまで宣伝をしようなどという卑劣な行為はホイホイする集団であります。我々の目的はと申しますと、とにかく楽しく子供と　ばんかい、という中々原始的なものでありまして、何とかセッルメントなどには無い底の浅さを特色としております。しかし、子供会に燃え狂う星飛雄馬的人間も存在し、かなりの満足を得ているところを見ると、そんなにいい加減なものでもなさそうです。駒場子供会に入会できるのは東京大学教養学部生及び駒場小学校児童及び**日本女子大生**であります。（恒河沙の人へ、……日本女子大生という文字は必ず太字にして下さい。（編集部注：この文句も書くよう指示があった）俺は女子大生など興味はないけれど、子供は大好きだ……という人、そう、あなた、どうぞ気軽に部室にいらして下さい。学館三〇二Aです。

さて、ささやかなCMの後はお待ちかねの本題です。いったい子供はどの様な才モチャを作ってくるのでしょうか。最近の子供は創造力がないと言われていますが、本当にそうなのでしょうか。都会の子は与えられてばかりで工夫することが少くなってきましたが、子供はそれで満足しているのでしょうか。本題に入ってからは疑問形ばかりになってしまいましたが、こちらとしても、それに答えることは、今はできないのです。もしそれを確かめたいのなら、一本の階段を登ってみませんか。あなたはそこに、子供達の魂の叫びを垣間見ることができる。かもしれません。

おっと忘れた。実はヒマな会長がこさえたもちっとこったおもちゃも出展されます。こちらの方は面白いことうけあい！みなさんどんどんいらして下さいね。

入会希望者は学館三〇二Aですよ。これで控え目な駒場子供会の駒祭PRを終ります。（駒場子供会．64SⅡ　豊川　博主）

美芽ちゃんのKFC日記

朝比奈　美芽

委員会室の隅の方においてあるボール紙の箱の中に印刷した紙クズがたくさんいれてあり、その上に、片方の手のひらにのるくらいの本当に小さなやせた子猫が2匹、チョコナンとすわっていました。親はなくとも子は育つというけれど、こうやって誰のものとも知れない猫に、毎日、ミルクをやってくれる人が複数いるということに心あたたまる思いがする一方で、我が家の飼い猫のぜいたくさに比べれば　やはりあわれでみじめで　委員会の紙クズの中で生きているってことが捨てネコの象徴みたいで、自分の猫でもないのにとてもやりきれない思いをしたものです。

それが約5週間前、9月初めのことです。

それからは時間の許す限り、猫のところへ行って身辺を清潔にしてやったり、まだムリかなと思いながらも　カンヅメのエサをあげたりしていました。9月も半ばになると駒場祭委員会が猛烈に忙しくなったので、ネコの世話係として、できる事はK・F・Cの方も手伝うということでK・F・Cに入ることになりました。

そんなわけで私がK・F・Cに入ってからまだ1ヶ月たっかたたないか、しかも猫の世話以外には事実上何もしていないのに、ここでK・F・Cのことを書くのはおこがましいことこの上ないのです。

さて、子猫たちの話に戻りますが、試験が始まる頃から夜の冷えこみがきびしくなり、トラ猫の方が(目の大きいかわいい猫です)風邪をひいて熱を出し獣医さんに見せる必要があったので　2匹一緒に私の家へ連れて帰りました。委員会室のある学生会館はコンクリートづくりでこれからは夜冷えますし　委員会室は日が全くあたらないので、子猫の風邪の方は治りましたが、しばらく私の家へ置いておくことになりました。8月の半ばから9月一杯可愛がって下さった方々に　記上であらためてお礼を申しあげます。

私自身は、かねてから興味のあった婦人問題を　本郷企画に参加して考える機会を得て、四月以来の自分自身の停滞に終止符をうつことができそうな気がしています。それにしても人生は何がキッカケになって、どう展開するかわからないということを実感として感じる今日この頃です。

ところで我が家にはすでに6匹の大きな猫がいて、中でもオス猫は互いに勢力範囲をあらそっており、決して平和な状況とはいえません。今は人間が子ネコを保護していますが　大きくなるにつれて住みにくくなってくると思うので、1匹あるいは2匹だけを暖かい家の中で可愛がって下さる方があればお願いしたいと思っています。飼って下さろうという方がありましたら左記まで御連絡下さい。

0425・81・0731　　朝比奈　美芽

(54 S II)

核が欲しい

〈駒場祭・昼下りの渇望〉

公卿 鬼寿〈編集部〉

「ますます村祭り化してきた」――日本における「ムラ」型政治を武器に昨年度私めの弱い頭を悩々に悩ましてくださった0教官は駒場祭をこう評した。僕はあの難しいテストを何とか切り抜けた今でも「ムラ」の概念がよく解っていないから、もしかしたら大変な誤りを犯すことになるのかもしれないが、兎も角0教官の「村祭り」論は何といおうと全く当を得ていないと言いたい。それは0教官が既に局外者の眼を確立してしまい（0教官は本学出身である）、今の駒場祭の深刻な状況を切実に感じ取っていないせいだ――。

「村祭り化」でなく、「お祭り化」している、と捉えるなら、まだ解るのである。機会あって見た十何年前の駒場祭のプログラムには、骨太く、気宇宏大なテーマが目白押しである。例えば「日米安保条約」の研究をクラス企画でやるなど、今では想像もつかないだろう（今年、もしやる企画があったならゴメンチャイ）。駒場は確かに所謂硬から軟へ（こんな簡単な言葉では片付けたくないが）いろいろなものを切捨てながら変化をとげ、まさに「お祭り化」した。それは確言できる。しかし、それだけの「村祭り」論なら全くおもしろくも何ともない。「ムラ」などという言葉を持ち出す必要が感じられない。

さて「お祭り」は「お祭り」として、切り捨てたもののわりに何と何とつまらない「お祭り」であろうか。確かに賑やかではある。だが、あの賑やかさは、果たして我々駒場人の作り上げた賑やかさだろうか。答えは否だ。賑やかというよりむしろ、只混雑しているといった方が正確だろう。それも外来の客によって。そんな意味での賑やかさなら無い方がましだ。あの盛大さ、賑やかさは盛り上りの証拠なんかでは毛頭なく、駒場祭をよりつかみどころのない、散漫なものにしている元凶なのだから。

少し筆が滑ってスッテンコロリンした。よく考えれば、つかみどころのなさの原因は、駒場祭に外部の人々が押しかけて来ることにあるのではない。むしろ我々の側にあるのだ。もちろん、たくさんの客が来た方がやり甲斐があるに決まってるし、露店の呼び込みなんかも派手な方が楽しい。だが、それらのことに第一義がおかれ、思惟の転倒が起こったとき、去年のような「つまらないお祭り」ができ上ってしまう危かするのである。

さて、つまらなく、つかみどころのない駒場祭という状況は、きっと、自分達の企画で喫茶店などにかかりっきりだった人にはわからないことだと思う。タコツボに入り込んでしまえば、時化の大波も何も関係ない様に、と、またこれはスッテンコロリンだ。僕自身も、自分のやった企画では十分充実し得たし、また、他の企画をのぞいて見ても、「これは！」と思うものがいくつかあった。恐らく、去年の駒場祭で何らかの企画に携わった人々はそれなりに燃焼感も充実感も味わっていたのではないかと思う――それはそれでよいのである。

しかし決定的な何かが足りないのだ。「何故、今駒場祭か」という問をはねかえすだけの力強い答が見つからないのだ。つまり、駒場祭が全体として持つ意味が面白さがどこにもないのだ。

その原因は一体奈辺にあるのか。どうもそれは、先程、硬から軟

へと一口に言い切ってしまった、昨今の駒場祭の変化のうちに求められるような気がする。研究発表やシンポジウム等の、規模、質、量の全てにおけるダウンは――誰も否めないことと思うが、それは、我々の眼が、ある意味で自分にしか向かなくなってることのあらわれではないだろうか。社会と総称される学外の世界に対する関係性を断ち（これが、最も象徴的なことである）、シンポジウム等で交わされるであろう、観客との間の精神的緊張を切り捨て、我々は給仕という形式で鑑うことのできる喫茶店や、自分たちだけで世界を作り上げることのできる演劇を選んだ。そしてその上、その結果として、タコツボ化が起こった。

駒場祭では各々の企画が交流し、相競い争う、ということが殆どない。タコツボ同志は決して共鳴し合わない。これこそが今の駒場祭をつまらなくしている最大の原因のような気がする。

村祭りは村祭り全体として楽しく面白いはずだ。O教官は都会育ちだから知らないのだ、その楽しさ、面白さを。村祭りの楽しさは村祭りのしっかりしたつかみどころ（何となく東農ですな）に支えられている。そしてそれは、村祭りの参加者――つまり村人が、ふだんから協働しあい、交流しあい、知恵しあって培ってきた一体感に淵源がある。しかし、この一体感が村祭りという場に凝縮してあらわれるには、祭にひとつの核が必要だった。鎮守の境内につくられた櫓をみんなで囲み、笛太鼓に合わせて踊ることが必要だったのだ。

今、駒場祭の深刻なタコツボ状況をくつがえすには色々な意味の核を作りあげていくしかないように思える。

KFCの単なる調整機関化を廃し我々の積極的突き上げで、もっと弾力的な幅広いものにしていくこと（本部企画の見直しなどはそれにつながるだろう）、グランド・フェスティバルを見せ物から、全員参加的なものへ変え、当日行なわれるスポーツ試合や仮装行列等の宣伝を広く行き渡らせることなど、改革の糸口は至る所に転がっている（大体、何でのど自慢がないんだ。'78LⅢ2の本間が可哀想じゃないか）。

核をつくることに全体主義的匂いを感じる人は、短絡的な民主主義に対する自信喪失者だ。もちろん、我々は一体感を無理に作り出す必要はない。それに村祭りでは一体感が作り出されたのではなく確認され、補強されたにすぎないのだし、駒場祭がひとつの「祭」としての意義をもちうるようになるためには、少なくとも僕は、この核を作ることしか思いあたらないのである。一体感を求めるためでなく、それぞれの企画の面白さが弁証法的にさらに高い次元の総合的な楽しさに止揚されるために、百鬼争鳴の状態が百花斉放となるために、核が必要ではないかと思うのだ。それらの核は、多様であっていい。いろいろな意味で、いろいろな次元にあっていいと思う。

右に書いたことは、駒場祭の〝祭〟の字をとり、その他若干の言葉を変えてみても、ある意味で成り立つと思う。「恒河沙」はその様な駒場の状況下で単なるメディアではなく、前述のような意味での一つの核たらんとしている。それを作るのは読者諸氏の力であり、絶大な支援を乞う次第である（'78LⅡ）。

広告
季刊
格・魚・謨
〈くろむ〉・今こそ聞こう、被害者の声
お申し込みは郵便振替口座東京7-310016同会へ編集：同誌編集委員会
定価二百円〒六十円・定期購読年間二千円半年千円、
発行：日本化学クロム被害者会事務局
TE 618-1714～5

クラス企画の16年——駒祭世につれ人につれ（編集部）

☆【昔の駒場祭って知ってますか？過去のプログラムにより、クラス企画を中心に調べてみました】

＊63年（14回）～65年（16回）
ほとんど全てのクラスが研究発表。
たとえば→女性と戦後20年、週刊誌と政治的アパシー、入試地獄はなくなるか？ 歴史教科書検定問題、民主々義に退屈した人々、崩壊する農村、私たちの沖縄、など

＊70年（21回）～73年（24回）
喫茶＋展示のクラスが多い。劇や映画も初めて登場し、次第に増加。

71年L Ⅲ「屋台」心の故郷〝屋台〟その構造をクラスで研究し、その伝統性に秘められた人民の土着性をさぐる。一九七一年秋、激動する情勢と歴史的な国民的大闘争の高揚する中で、我々はここに革命前夜の屋台を実現する。さわやかリツ子さんも田中くんも、是非来てほしい。

73年S Ⅱ Ⅲ「よみせ」 駒場祭なんて高校の文化祭の延長だと思っている人にその典型をお見せしましょう。研究テーマでは、公害、日本列島改造論など時節を反映しているもの多し。

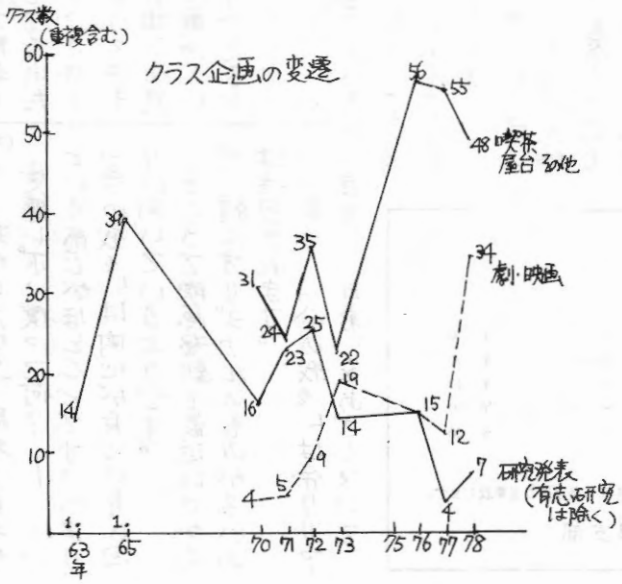
＊76年（27回）～78年（29回）
喫茶・屋台は大幅に増加。クラスの〝たまり場〟的な場所として。劇や映画も増加するが研究発表は77年ついに一ケタとなる。

76年S Ⅱ Ⅲ「現代女子学生の意識を探る」……「姉ちゃんの研究に決まってるやないけ。」
ディスコ増加。写真屋さんなども登場。

77年L Ⅱ 「暴力喫茶」あなたと!! 空前絶後。紅茶専門店。スリランカ大使館御用達
（P客は入ったのかしらん？）

研究テーマは「教育」か実態調査のアンケート集計がほとんど。社会情勢的なものはサークル活動で？

↓63年（14回）



まとめてみると

クラス企画で駒祭に参加するクラスは、63年の15クラスが78年では約6倍の89となっています。（重複含む）

みんな元気だなあと思います。今はシラケタ世代とよく言われますがそんなことは一概に言えないように思います。

ところでそのクラス企画の内容を見てみますと、63年では15クラスのうち14、つまり9割強が研究発表で、78年では5割は喫茶、屋台、〝モグラタタキ〟、4割弱が劇と映画、1割にも満たないのが研究発表となっています。

（いやいや、まだ〝ダカラ今ノ学生ハ政治ニ無関心デダメナノダ〟とは言いません。）

60年代と70年代初頭のクラス研究とは

―東京周辺の基地問題・国際通貨危機研究、きみにとって労働者とは何か、「開発」への考察・日本は豊かになったのか？―

など硬派がずらりと並び、今のパンフレットに喫茶店名が山のように続くのとはかなり趣きが違います。ついでに、最近のクラス研究のテーマとはと申しますと(*)

↑63年（14回）

65年LIIT 社会戯評に見る

戦後歴代首相の功績」私達日本国民が心から敬愛し、戦後の平和日本の象徴だけでなく国際緊張緩和の平和の使者としての首相。現在みる如くアジアの指導国、世界の大国の一つである日本のNo.1の男性としての首(↘)

(へ)相。急速な経済成長を推進して生活をゆたかにしてくれた日本経済の名コーチ、このように万能の神ゼウスにも比べられる私達の首相の実際の仕事ぶりは、社会戯評という漫画を通してふりかえるとどのように歪んでみえるでしょうか。

(*)―現代の大学生、駒場S系生の実態レポ、僕って何？―

という感じがほとんどです。つまり、「今の我々」は関心が自分の身の回りに向いているようです。

ところで映画演劇も最近はさかんで、特にオリジナルのものが多いのは注目されます。

つまり、「今の我々」は余りリアリティの無い〝社会〟よりも、〝自分〟〝日常〟をめざしていて、オリジナル製作をしたり、クラスで参加をするというエネルギーも充分にあるように思えます。

けれども、駒祭が楽しいと言える人は限られた人でしょう。大体は、まあどのページをめくっても同じようなゲームセンターとかおでん屋とかが続くだけで、サークルでまじめな研究発表を聞くというのもめんどうだし、講演かどっかのコンサート聞いて焼きそばでも食べよう、と、まあ別にこんなもんなんじゃない？と帰るのではないでしょうか。

つまり、結局〝マンネリ〟なのであります。ではなんで〝マンネリ〟なのでしょうか。

筆者にもよくわかりません。

思うに、いくら〝日常〟をめ(**)

↓65年（16回）

学館食堂御案内

―よりよき生活と平和のために―

ランチ	¥70	タンメン	¥60	ケーキ	¥50
〃	¥90	やきソバ	¥80	シュクリーム	¥60
〃	¥120	月見ソバ	¥60	ジュース	¥40
〃	¥150	五目ソバ	¥80	サラダ	¥50
カレーライス	¥50	コーヒー	¥50	スープ	¥30
ラーメン	¥50	ココア	¥50		

☆ 書籍，購買，食品の各部も通常通り営業致します。

東京大学生活協同組合駒場支部

63年SⅡⅢ「農村を知る」日頃学園にとじこもりがちな我々は「この目で、身体で感じよう！」と思い立ち、長野県の農村でクラスの大多数が働きながら生きた農村を知ることにした。農業労働の実際的経験や青年団との交流によって得た成果をスライドその他により発表する。

77年LⅢ「巴露泥喫茶・巴露泥市」パロディは万人によって求められることにはあまり気が進まず、冗談は万人によって愛されることを自ら望むわけでもない。かつては民を自信過剰ならしめるために学問を押しつけたことがあった。今や馬鹿馬鹿しさを日常茶飯事とすることは常に軽薄な若者のさまでもない願いである。「大ばろでい市」はたいした使命感もなくでっちあげられた。私達の部屋に来る者は全て自らの頭脳に自信を持つに違いあるまい。(漬書子に寄す)

恵まれた
風土が生みだした
味のエリート！
ニッカエキストラ
340円
ニッカ
ウ井スキー
ニッカウ井スキー株式会社

63年（14回）

(株)ざそうと、結局ごごしか視界に入っていないのではないでしょうか。なにか、最近のパンフレットを見ていますと〝日常〟というやつに飲みこまれているように思えるのです。

もっとも、そこから脱け出すというのは一体どういうことなのか筆者によくわかっていないので、非常にこの文が書きにくいのですが…。

いずれにせよ、駒祭をやるからにはマンネリを脱しておもしろいものをやりたいと思うのですが今年の駒場祭は一体どうしましょう。

【狸】

時代錯誤社からのPR

時代錯誤社では駒場祭に，フリートーキングの場を提供したいと思います。

テーマは、『若者論』に異議なし？ ―ノンポリについて考える，として，今さかんに言われる「今の若い奴はシラケだ，政治に無気力無関心だ」という「若者論」に対して自由に考えたいと思います。そもそも政治とはシラケとはなんなのでしょう？

出席者としては，本学哲学教官の廣松渉氏等予定しています。

日時：11月25日（日ようび） pm12:00～3:00

場所：159番教室

＊なお、第8号（11/22発売予定）に、「シラケ論」「政治的無関心論」について原稿を募集します。投稿要領は p.25を御覧下さい。

しょおとしょーと パラレルワールド

字野はるか

朝はねどこでラジオを聞くともなしに聞いている。7時のニュース。ありきたりの内容だ。貿易のこと政党内のゴタゴタのことどこかの国の戦争のこと……そして二ュースの終わるちょっと前にアナウンサーはごく平然とこうつけ加えた。

「昨夜東京都江東区でまた一人のイジゲンジンが〆捕されました。これで〆捕されたイジゲンジンは33名にのぼり厚生省では〆捕に全力をあげると述べています。」そして〝朝のポップス〟「おはようございます朝のポップスです…」とさわやかな女性の声、毎日同じパターンだ。「今日も一日明るくさわやかな日を…」

うん。まあね。とはいえさっきの聞き慣れない言葉は何なのかしら・イジゲンジン。

中近東かなんかにそんな国あったのかな、まぁなんせ社会情勢にうといもんでわかんないな・とそそくさとトーストかなんか食べて学校へ。なんやかんやで通学には一時間はかかるので今日のように一限から体育があるという日にはなかなかに忙しい。でも途中で駅の売店に寄って朝刊を買う。さっきの聞きなれない言葉が気にかかっていたので。

ホームにはうんざりくる人の混雑。あまりにうんざりくるので一本ぬかす。その間に新聞をパラパラとめくる。昔はTV欄からだったけれど今はTVもない下宿ぐらしのため一面から。まぁあんまり読むこともないね・というか興味するにわかんないからなんだけど。で、さっきのイジゲンジンのニュースを探す。社会面…小学生が自殺・どっかのサギ・おおあったあった…「異次元人また発見・都内だけでも400人?」

?異次元人?こりゃまるでSF下やんけ。

「江東区で昨夜また異次元人が発見された。会社員佐藤栄一氏(32)の名をかたって潜入していたのが発見されたもので自供によると一年前からすり変わっていたという。奥さんの美由紀さん(30)は『こんな怖しいことが…あの人はどこにいるのでしょう。』と責めて語っていた。近所の人の語るところでは『まったく気がつかなかった。人あたりのいいおとなしい人で。わからないものねえ』厚生省の発表ではこれで発見された異次元人は33名にのぼり・まだ潜伏している異次元人は400人はいると見ている。」

ざーっと読んでこっちはまったくたまげてしまった。不可解なのはこの記事にしてもさっきのラジオにしても まるで一年前からのできごとのようにごくあたりまえな口調で語っていることだ。いくら私が社会情勢にうといとはいえこんな珍妙なニュースを今まったく初めて聞いたってのは奇妙な話だ……けれども電車がやってきてどわーっと人が降りてこっちもどわーっと押しこまれてゆく。べたっと三、四人の他人と密着したまま動けない、しようがないので天井を見上げる。週刊誌の広告だ「竹下景子結婚?」「三船プロの危機!」それと並んで「異次元人の恐怖!異次人の〝夫〟と暮した妻の手記」

まあそんなこともあるかもしれん。そんなもんよりこの身動きのとれない車内の方がよっぽど異常だ・どうして誰も暴動をおこさんのだろう と〝憮然たる思い〟のつもりの表情で天井の扇風機を見ている。

学校はまあマンモス大学・ありふれた学生がありふれたキャンパスを歩いている。こっちもありふれた顔をしているわけだが。体育

のあと生協の2階に行くと、そばで女の子3人がおしゃべりをしていた。聞くともなしに聞いている。
「それがさあ、ほら、15組のタムラって人いたでしょう、あの背の高くて無愛想な顔した人。」
「しらない。」
「そのね、タムラって人がさ 異次元人だったんですって。」
「えーっ」「うそお、ホントウ?」
「それがねえ、つかまった時あたし、そばにいたのよ。社会思想史の始まる前でね、突然ドヤドヤとお回りさんたちが入ってきたわけ。え、ほらあの正門の前にいつもパトカーとまってるじゃん、あの人たちらしいんだけどね、みんなギョッとしてふりかえったのよ、そうしたらさあ、すーごい、ほんとまっ白けな顔になってさ、え、血の気が引いてよ、あったりまえじゃない、それで何するかと思ったら逃げ出しもせずにおいおい泣き出すんだもの、最後には〝ボクは何もしていない、そっとしておいてくれ〟ってシャックリしながら言うのよ」
「だらしない異次元人ねえ」
「かわいそうになっちゃったわよ私。ね、あのヒトたちどうなんのよ」
「しーらない、どっかに隔離されてんじゃないのアパンリとかタマガワとかに。」
「どうしてバレんのかしらね、もーのすごく似てるのよ本物に。」
「ちょっとずつ違うらしいわよ、ツムジの向きが逆だとか食べ物の好き嫌いが変わったとか。でもさあ、親兄弟でもほとんどわかんないっていうじゃない。」
「そうなのよお、だーから気持悪くって。」
「あるいはあんた、そうだったりしてね。」
「わ、バレタカ。」ケタケタ…
私は、次第にこっちの顔が青ざめてくるのに気がついた。そう、ひとつの決定的なことに気がついたのだ。
つまり、私自身が異次元人なのだ。それですべてツジツマが合う。今朝まで私は〝異次元人さわぎ〟なんぞ聞いたこともなかった。つまり私は昨夜から今朝までの間に何かの拍子で違う世界に入りこんだというわけなのではないか。
しかしどうも自分がアホらしい妄想にとりつかれているような気がして恥ずかしかったのだが。女の子たちはまだ話している。
「あのパラレルワールドって何なのよ」
「うーんとさ、そのね、おんなじような世界が何だかしらないけど無数にあんだってさ、それでどれもそれぞれで完結してて、ちゃんと区切られてるんだけど今回どっかに破れ目があってね、大量に潜入してんじゃないかって話よ、ニュースセンター9時で言ってた。」
「侵略してんじゃないの、こっちの世界を。」
「そういう説もあるけど、でもね、それぞれの異次元人を尊重してもすーごくおとなしくって攻撃的でないっていうわよ」
「そりゃ仮の姿でさ、ホントは。」
「それにみつかんのはドジな奴だけなんでしょ、筋金入りの異次元人ならもっと用心深いわよ、それできっと深夜に秘密集会があって…」
「みつかんのってほんとに一部だけみたいね、東京だけで500人はいるっていうじゃない。」
「もっと多いわよアレ。ほらさ、ごきぶり一匹みつかればその家に20匹はいるっていうでしょ」
「キャーほんと?」
「うん。だからさ、ごきぶりホイホイとかああいうの、ないかしら。道ばたに置いといて、異次元人だけつかまえんの。」
「そもさ、こういう話しててもさ、この生協には2、3人の異次元人がいると思うとゾッとしてこない?」
「わ…」

女の子たちはゾッとしたようで、そっとあたりを見回していた。こっちはすでに〝用心深く〟経験をすり文庫本を読むふりをしていた。

どうも、やっぱり本当らしい。因果なことに私自身が異次元人になってしまったのだ。こうなった以上はアバシリだかタマガワだか知らないがそんな所に送られないよう用心深く暮していかねばならん。しかしそれにしてもこの世界にいた私はどこへ行ってしまったのだろう。私のもといた世界に入ってノホンとやってるに違いない。異次元にずれたことなど一生気づかないで。

それに、もと居た私とこの私は一体どこが違っているのだろう、ツムジの向きなんて第一調べたこともないし食べ物？あるいはあいつは私の死ぬほど嫌いなラッキョが大好きという場合もあるのだ。まったく冗談ではない。まあいい、おとなしくおとなしく生きなければ。とにかく型破りなことは目立つからできない。平均的な人間の生き方をしよう。

私は昼食時になって混み始めてきた生協を絶望的に見渡した。この多勢の人々、その中に私と同じ境遇にいるヤツは一体どの位いるんだろう？そいつも今の私と同じように絶望的な気持でたったひとりで世界をながめているんだろうか。

〔78L II〕

これはなんでしょう？
まるいねずみがうしろを向いているところです。

ロミオとフリージアのある食卓

劇団 綺畸 第10回公演

10/30～11/4

平日 6:00～
土・日 2:00～
6:00～

前売 500円
当日 600円

↳広告です↲

劇団 漠

清怨夜曲

構成・演出・重政重

11月30日（金） 6:00～
12月1日 4:00～
2日 4:00～
at 駒場小劇場

前売500 yen， 当日600yen

予約、問い合せは

tel. 712-2585（小玉方）へ
pm 10:00～

創作

或る対話

コンポラ＝フォト

彼女はY公園にいた。某料理学校の一年生であるが今日はすべて休講だということで、一人で散歩に出たのである。初秋のつやつやと肌ざわりのよい空気の中で、寂しさの増した陽光の中、つくねんとベンチに座っていた。

まだ昼休みにはなる時間とも思われぬ頃だったので、いつもならアベックや親子連れでにぎわうこの公園も、自然に近い虚脱感を楽しむ小鳥達以外は、少しでも退屈さをまぎらす対象はないといってもよかった。それでも彼女の意識には全くと言っていいほど具象的なものは何もなかった。現実の細々とした苦労に嫌気がさしたというわけでもないし、現実逃避の立場から世間を下瞰するほどの小賢しい教養やエリート意識があったわけでもない。ただ何ということもなく、昨日までの料理の講習がハードであったことに対して、嘆息していたに過ぎない。しかし彼女は決して流動的に生きているわけではない。たとえ理屈でまとめることはできぬにしても、確固たる信念というものを、少なくとも雰囲気で知っていた。現実の生臭さからの逃避に反発する態度を本能的というまでに深層心理に持っていた。……といっても今はそんな情動を起こす外的要因もなかったから、ただ無心に、人工的に与えられた「自然」と同一化していく自分の肉体を感じつつ、閑静なひとときを享楽していたのである。

しばらくして、そのささやかな静寂が破られた。昼休みになったのである。多数のサラリーマン、OL達が騒ぎながらあちこちから繰り出し、普段の活気をかもし出すと共に、それまでのささやかな閑寂を、全くミクロ的な閑寂に分断してしまったのである。

小鳥達が急速に現実に引き戻され、人間達の与える食事に労せずしてありつくことができるようになったことにより、辺りは一べんに現実色に塗りつぶされてしまった。不変であるはずの噴水までもが、これまで多少なりとも与えられた自然の中で見事に呼吸し調和していたものの、一挙に完全に機械的な、文明の産物として、全く別な調和をするようになったのである。

彼女は別にこうした事を嫌だとは思わなかった。むしろ現実に戻った事が嬉しかったし、周りの人々以上に活動的なエネルギーを蓄えたかも知れぬ自己に気付き、何か力をぶつける対象を求めるまでになった。自然の中から一気に一八〇度転回して、いつもの彼女に戻ったのである。

――やあ木村さんじゃないか。

一人の青年が声をかけてきた。

――あら鈴木君、久し振りね。大学おもしろいかしら。

彼は中学時代のクラスメートであった。

幼時から成績抜群で一流高校へ進み、この春見事T大文科A類へ現役でパスした男であるが、また非常に雄弁且つ文才もあり、周辺からは将来の大物政治家と目されてもいた。

彼も彼女も容姿はまずくはないかわりにそれほどの美男美女でもなく、また鈴木には時折病的に深刻にものを考える癖があって、中学時代、全くのミーハーだった二人は、別に恋におちたわけでも何でもない、ただの友人であった。彼女の方は一流高校の受験に失敗し、その時点で二人の間には何の音さたもなくなってしまっていたのであった。恐らく今では二人の人生観も甚だ違うはずであり、経歴の差は、どうしようもないコンプレックスを彼女に負わせるもの

であったろう。しかし久し振りの再会ということで、二人はただ無心に嬉しかった。

——昨日試験が終ってさ、実は今日から一ヶ月程秋休みなんだよ。それでこんないい天気だろ、だから家で本読んでるのもバカらしくなっちゃって。誰かに会えないかなと思ってブラッと来たんだけど、まさか君に会えるとは思ってもみなかったよ。

——本当にしばらくぶりね。私は別に試験があるわけじゃないんだけど、それでも料理の実習がすごいツメコミで忙しくてしようがないのね。今日は久々の休講だもんで、ゆっくりと休もうと思って……。

鈴木君、しばらく見ないうちに男前になったわね。勉強してるとそんな顔になるの？

——よせよ冗談言うのは。そういう君はしかし、冗談抜きで、すっかりコケティシュになったじゃないか、見違えたよ。

——コケティシュって？

——色っぽいって事。まあ、さらに言うならちょっぴりセクシーかな？

——やあん、恥ずかしい。でも私、あんまりむづかしい言葉知らないのよ。

——ごめんごめん。でもコケティシュなんて美しい言葉は知っててもいいと思うよ。

その時、二人はお互いの間にホンノリしたものが通っていることに気がつかなかった。

それは極微小ではあったが、衝動にも近いときめきであったろうか。幼なじみの成熟した男女が相対した時の恥じらいは、全くの初対面の場合よりも往々にして深いものである。気心が知れているから、相手の心情にワンステップで入っていける、それだからこそ心理的障害は何もなく、あるのはただ男と女という意識のみ。急速に恋人同士にも近い理解が得られ、その急変化にとまどっているうちにも話はどんどんはずんでいく……。成熟して美しく、あるいは逞しくなった幼なじみの再会は、それゆえに強烈な心理的動揺を発生させるものなのだ。しかし、この二人に限っては、「中学時代のただの話し友達」という意識があまりにも強く、お互いへの安心感、なつかしさが、性的なときめきをはるかに凌駕していたのである。二人は今だに昔ながらの友人であって、ただ、ほんの毛のはえたように暖いものが表れてきても、目に見えるほどではなく、それゆえ気がつかなかったのである。

——でもね鈴木君、私ね、前から思ってたんだけど、どうして頭のいい人達はむつかしい言葉をわざわざ使うのかしら。コケティシュなんて誰が作ったか知らないけど、セクシーっていうだけでも充分セクシーに見えるんじゃないの？

——いや、言葉にはね、たとえ同じ意味があったにせよ、その発生源はみんな違うんだ。だから言葉の持つ雰囲気や背景は使い分けた方がいいと思うね。それには沢山の語を知っていればいいわけだ。

——だけどそこまで神経使うことないと思う。言葉っていうのは意味を伝えさえすればいいんじゃないの。大体の筋が伝われればいいわよ。細かいニュアンスがどうのこうのなんて、秀才ぶってていやらしいと思う。

この時彼女は、彼と会う直前に味わった活力がみなぎってくるのを感じた。議論をするなどという仰々しいものではない。ただ自分の主張を通したいという願いが衝動的に燃えあがってきたのである。絶好の標的が出来た。彼に現実の冷酷さを味わわせてやれればいい。しかし雄弁な彼に理屈で勝てる見込みはなかった。それでもたとえ情念的になったって構わない。自分や、現実の苦しみに悩む人々の生活実態を雰囲気だけでも、T大の坊やの鈴木に思い知らせてやろう。……そんな考えが、果してコンプレックスと一体であるのかどうか、彼女にはわからなかった。いや、そんなことはどうでもよか

ったのだ。自分の信条を通してやろうという思いだけで精一杯であり、通りさえすれば、それを彼が何らかの形で認めてくれさえすれば万事はうまくいくのであった。彼女は続けて言った。

——こんなこと言うからって、別に私、あなたの学歴がねたましいわけじゃないのよ。でもね、例外を除けば、およそ学問なんて実生活には無意味よ。単なる頭の体操ってとこかしら。学問のできる連中って、威張ってるばかりで、私達みたいに社会の底流で苦しんでいる人間のことなんか、いつも見おろすようにしか見ないんだから……。

不思議なことが起った。彼女は自分でも異常に雄弁になっているのに気付いた。一種神懸ったとでもいう感じに、何か知的ひらめきが次々に起こり、次々に複雑な論理を生み出していこうとしている。何者かにあやつられているかのような、そんな感じであった。しかしそれならば彼とは対等に渡りあえる。そんな彼女に彼もまた気付いていたが、どういうわけか不思議だとは思わなかった。彼は言った。

——それは偏見だ。一般には実社会に役に立たないといわれる数学でも文学でも、その発生は必要によるものだし、そうした学問でメシを食ってる人々だっている。実社会に直接役立つか否かということは学問の価値尺度にはならないんだよ。

——ああわかりました。しかしね、学問をただ人を見下す道具に用いる連中もいるわよ。学問を知的武装として大いに活用しすぎる人達ね。その人達にはね、私達のように日常生活を生きぬくことで精一杯なものの苦しみはわからないかわりに楽しみもわかんないと思うわ。私達のこと、努力が足りないとか、素質がないとかで片付けちゃって、人格として尊重すらしていないのよ。もちろん無能な人に対しても平等に語ってくれる人も少しはいるけど、その人だって内心はどうだか。結局秀才なんて驕慢と虚飾の弊に陥らざるを得ないんだと思うわ。ほら、三太郎の日記で阿部次郎がこんなこと書いてる……『もし世に平凡な者に対する同情と尊敬を欠き、平凡な者を指導すべき使命の自覚を欠く天才があるならば、彼の非凡は妖怪変化の非凡にすぎない。彼は人間の代表者ではなくて仲間はずれである』って。大部分の秀才は、仲間はずれよ。

——そうか、それで君は『平凡な者が彼の驕慢と自恣とに報いるに反抗と復讐を持ってするは当然にすぎるほどの当然事である』といいたいんだな。しかし平凡な者が本当にエリート意識から脱皮しているという命題自体問題だと思う。たまたま能力が身につかなかったにすぎず、それを悪くいえばヒガムこと自体、驕慢自恣の裏返しだよ。

——でもそれは人情なのよね。たしかに努力もせずに自己の領分だけ必至で守ろうとしている凡人は救われないだろうし、いじけてもいるでしょう。けど、そんな人々が否定されたところで消えてなくなるわけでもなし……それが現実として認めざるを得ないだろうし、彼らの心情を教化しようったってそれは無理よ。第一、客観的な価値観なんて存在しないんだし、そういう人達がいたっていいんじゃないの？

——すると君は、驕慢な秀才をも承認するわけだ。それから君は今、そういう人達がいたっていいんじゃないのなんて言ったけど、それは少々無責任に過ぎると思う。

——だって現実には……

——まあ待てよ。僕はね、この前友人と酒を飲んだ時に、幼少時からおけいこ事を習わせる親の是否について論じたんだ。僕自身としてはね、まず自分でしっかりした価値観……この場合、決して客観的というのではなく、一般に多数に受け入れられる価値観という表現に近いんだけど、それに達するまでは親の考えを押しつけることはいけないって言ったんだよ。親に与えられた道それだけで行くと大体は失敗する。現に音楽家でも、一般的社会常識を

着しく欠く人がいるではないか。もちろん趣味にとどめるのはこの限りではないけども、病的な事態については、きびしく糾弾すべきだと思うわけだ。するとそれに対して友人がいった。『人間の価値観なんて、ほとんどが受け売りであって、たまたまそれが一般論であったとしても、その形成過程は外から与えられたものに過ぎないんだ。別にとやかく言うこともないだろう。たまにはそういうのもいたっていいんじゃないのか』ってね。

——うん私もそう思うわ。

——でもね、一つ視野を変えて考えてみろよ。確かに社会全体から見れば、そんな人々の存在は苦にならない。しかしその人にとっては、それがすべてなんだ。そういう人格だけが付与され、他の事柄は体得できないんだよ。いわば特殊……一般的に見ての特殊だけども、それを選んだばかりに、常識を放棄してしまうんだ。もう取り返しがつかない。恐ろしいとは思わないかい。囲目八目でもって、『いたって構わない』なんてこというのは、その人の人格について、あまりにも配慮がなさすぎると思うんだよ。

——じゃあどうしろというの？

——我々としてはね、その人ができるだけ早く公平な見方ができるように、たとえうるさがられても、徹底して干渉すべきだと思う。もちろん社会的利害に触れない程度にね。つまりたとえ異常人でも、社会的に必要な人間には、その役目遂行の邪魔をしないでおき、時折忠告してやるという程度にね。それが思いやりというもんだよ。

——あらそう、それであなた方秀才は、一般的にみて好ましくない平凡に対してアリガタイ御忠告をして下さってるわけね。どうもどうも御苦労様。だけど忠告される方はそうはとらないわよ。秀才になれ、秀才のように考えよったってそれは無理よ。あなたたち秀才の側からは一般的なことも、私達の側からはとんでもない特殊なのよ。カフカじゃないけど『まるで犬みたい』に生き、死んでいくのが私達の哲学、あなたにはそう思えてバカらしいでしょうけど、私達だって精一杯、生きてる者は生きているのよ。あたりは太陽が強く照り、すでに公園は人かげが少なくなっていた。彼は言った。

——その生き方なんだよ、問題は。秀才にはね、凡人を導いてやる任務があるんだから、もちろん浅薄なエリート意識は許せないけど、それを原動力として、やるだけのことはやるべきだ。凡人に少しでも、秀才からみた客観をも学ばせてあげるべきだ。凡人はとかく自分の殻にこもり安いからね。

その頃から、彼女はなぜか天与の理屈を失ってしまいつつあった。もはや議論は続かなくなった。実に不思議なことだが、話に疲れた彼女は、白熱する議論に耐えうる精力を、直射日光によって蒸散させてしまったのである。急に目まいがしたかと思うと、すっくと立ち上った彼女は、こう言い捨てて立ち去っていった。

——私にはわかんない。でもきっと私は正しいわ。きっと正しいんだから、きっと……。

（79 L II）

今月の標語

二万円
水で割ったら
二千円

（編集部）

散文詩

愚者の夜

原口 一博

無気力を吐く奴がいる。まるで腐った臓腑のように。ところがその臓腑が文体となればそれはそれで一つの自己主張となるから驚きだ。コウカシャとかいうパンフの中、この腐敗物が私の胃をムカムカさせた。あれは六月。雨の降る日。

「他人をケオトシて東大にきて無為に日をすごす。俺は酒と麻雀におぼれ、留年をま近に……。」六月の私は、野望と情熱に身をたぎらせ、この文に対し若者としての義憤さえも感じたものだった。だが……

渋谷駅の便所の中では、男たちが民青と新左翼について声高に議論していた。その内容は不毛で「闘争」がやたらと耳をついた。トロツキスト?、観念論者?、勝手にしてくれ。学内では鼓膜もつんざけよとアジテーション。その傲慢と無知。髪をくしゃくしゃにして、そいつの前にワーと叫んでひれふしたら、さぞ喜ぶであろう。

電車の中、その女は足を広げて座っていた。赤い口紅、きつねのように細い目、どぎつい化粧。赤すぎる口紅は、非常ベルのいやらしさ。青い顔の私をあざわらうかのように足を広げてみせる。

隣りのオッサンは身をのりだす、愚かな深夜の電車の中。脳髄がしめつけられ、耳からはみだしてしまいそうだ。口のおくが、ベトベトとして、何かこみあげてくるものがある。美しかった恋人の死顔か。あどけない彼女の微笑みか。

緑色の男はどでかいはらをかかえ、ぶあつい肉を脂でぎらぎらさせ、細い目で見る。ナイフで切ったような細い目。目。このブタやろう、血だらけでころがれと思う。そう思った矢先、キリスト教徒の私があわれんで私を見る。

ああ……

勝手にしてくれ、明日は安息日、私は教会へ行くのか。

絶望と否定の鎖にしばられて、頬はこけ、一人酒を飲む。

太陽までとぼうとした翼は、はげおちて青い目はもうない。あるのは血走った眼球、そして不信。二十そこそこで私は、生意気にも風化しかけた倦怠の中。 One day closer to death

(日々死へとむかう。)

何故か今、「老い」のことばかりを考える。それも私がまだ若いからか。

「老い」の先には……何?

都会のこのくそいまいましい現実。心をひらかぬ女。そして自分。自分にはいつくばる蛆虫。そして自分。

性のハンラン。腰から下でしか生きられぬ人間ども。クリストスとペニスの山。そしてそれで金をとる「文学」

弥勒菩薩の前、数時間も我を忘れて手をあわせたのはいつのことか?

カントにひかれ涙をながしたのも、やっぱりウソか。

イエスは尊かったではないか。

だが神の前で自分はあまりに卑小すぎた。

人間はあまりにも……

永遠の愛を誓った人の死んだのは七月。

熱情家は三十才で十字架にかけよ
かつて欺かれた人も一たび世間をしれば
悪者になる (ゲーテ)

(54 L Ⅲ)

時代錯誤家

「全くの私事ですが…」

故郷は遠くにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの。

初めて屋星のこの詩を読んだ時「あ、この人はやっとの思いで帰った故郷で冷たい扱いをうけたのだなァ」と短絡的に決めつけて、それっきり自分がそんな事を思ったことまでコロッと忘れていた、この前の夏休み初めて帰省するまでは。といっても何も私が父母に冷遇されたわけではない。客観的にみれば全く逆であろう。

かなり以前から"親子の断絶"ということがいわれ、実際私の友人にも「娘があまり話さないから寂しく思う母親が娘の日記を盗み見る。娘はそれに対し、又不信感をつのらせる」といった悪循環がいくつも見うけられた。しかし私は「我が家だけは違う」と信じていた。私は学校の事からかなりキワドイお話まで、あけっぴろげに親に(特に母に)話したし、親も今だ「娘は親元から出さない」という気風の強い九州で「女だからってとじこもることはない。」といってくれた。両親は私を信じてくれている。私の自主性を尊重してくれている。さりとて母者も好奇心の強い女、結構私の部屋をのぞき見ていたが、別段それに腹もたたなかった。(それ自体一番問題だったりして)

私の家は関門海峡の向こう側。金なしヒマなし、また恐らくは多くの新入生が味わったであろう無力感と焦燥のさ中で帰省などするのは"逃げ"のような気がして5月の連休にも家へは帰らなかった。でもそれだけ「家へ帰る」ということは、私の中で何か大きな支えのような物へ育っていったのだ。今までスモン等の新聞記事も「悲惨なこともあるんだな?」と(一応、世間ではそう感じるものらしいから)読みもせずとばしてきた自分が、今だ本からのみの"知識"としてだけでもそういう現実に目を向け出したし、本当の自分の"経験"というものがないのを痛感しておっくうがらずに何でもやってみようと模索しだしてる、そんなささやかな変化も両親は喜んでくれる。そう信じていたのだが…。

渡野が広がったと気負いこんでいた私は(若かったわねえ)家に帰るや喜んで話しだした。「いのちの讃歌」の木村浩子さんに会いにいったこと、家までオーム飲行で帰ってきた途中のこと、入学以前には全然感じていなかった受験体制への疑問や、疑問を感じなかったことが問題と思うこと等々。初めは笑ってきいていた両親の顔が徐々にひきつってきた。

「ボランティアや社会問題もいいけどねェ…。そういうのは老後の楽しみにとっといたら?」「もっと楽しいサークルに入ったら?」又、私には兄弟もあり「家庭内の問題」も確かにあったのだが、今まで受験という隠れみのをかぶって知らんぷりしていた。しかしやはり自分の家族の事だ、これではいけない、と思い「今までこういう点が悪かったと思う。特にお母さんは自分の思った通りにさせようとしすぎる」といったところ…結果は悲惨だった。母は泣き出すし、父は「然とする」(後からきいた話では、私が勉強をやめてボランティアにでもうちこむつもりと思い込んだらしいのだが、それならそれで娘が自分できめた事だからと理解してほしかったと思うのはやはり甘えだろうか?)

その晩は眠れなかった。今までツーカーでうまくいってたのも結局は"対話"などしたこともなくてすべて笑い話ですませてきたからじゃないかしら?家を出て自律的に生きる、ということも私の自主性などではなく、「女ながらも…」という栄光を娘に仮わせようとする親の思惑(その思惑のおかげで今の私があるのも真実だが)の

原稿募集

みなさんは中学や高校のとき，ラジオの深夜放送なんかを聴いたことはありませんか。番組で読まれる文章は，大論文なんぞではもちろんなく，身近な出来事や，考えたり感じたりしていることをチョイチョイとハガキやびんせんに書いたものでした。基本的には，書く態度としてあれと同じものを求めています。むろん中学生と大学生ではそれなりのちがいはあって当然でしょうが（案外なかったりして）気軽にペンをとり，思うところをどんな形態であれ率直に出して欲しい，恒河沙編集部ではそんなふうに考えています。下宿のオバサンの話，恋愛の話，あるいはいっこうにそういう類の話のない"ひとり身"の近況，郷里の話，バイトのこと，教官の話，酒や麻雀にまつわる話，学生生活と将来のこと，社会状況のこと，生き方についてのことなど例をあげればきりがありません。クロスワードの裏に自由に書くスペースを作ったのも，その一助となればと思ったからです。本誌に載っている文章に対する感想や，恒河沙の存立意義そのものに対するシビアな意見など何でもかまいません。ぜひ，あなたもペンを取って下さい。恒河沙はもともと皆さんの文章で成立っている雑誌なのですから。

次号に載るためのメ切り：11月5日

内容：駒祭が近いので，自分はこんなことをやろうとしているとか，駒祭全体に対する意見などはタイムリーだと思います。むろんその他でも全くかまいません。

形式：編集の割りつけの都合上，字数がわかった方がたすかるので，できれば原稿用紙にお願いしたいのですが，それもどうしてもというわけではありませんからハガキでもレポート用紙でも結構です。枚数制限は全くありません。誌上匿名は可ですが連絡先は書いて下さい。

宛先：練馬区練馬4-1-18 小山方 時代錯誤社

うちにのせられてきたような気がする。一方，"家庭"には外の争しから逃れてこれるような，言葉をつくさずともわかりあえるイメージがあるこれも事実だ。昔ながらのイメージはもう通用しないのだろうか？それともそんなイメージは初めから虚像にすぎないのだろうか？

それでも私が東京へ発つ時，母は「たくましくなったって感じしたよ」といってくれた。泣きたいような，ごまかされたような変な気分だった。今でもよく「家へ帰りたいな？」と口にするけど，実際，もうあまり帰らないだろう。

【風】

JOHDAN

毛沢山

L：今の日本の労使関係を見る限り、我々が労働・資本のどちらに味方せねばならないかは、きわめて明白なことである。

R：どういうふうに明白だというのか？

L：つまりな、我々は資本に対して劣勢な立場にある労働者の側に立たねばならないということだ

R：弱い人間を救ってやろうという考えか。一体君はそのために、何をしようというのか。

L：僕は将来は労働弁護士になって労組の人たちと手を取りあって労働運動を盛り上げて行こうと思っているんだ。

R：つまり、自分はインテリゲンチャとして知識のプロレタリアートを善導してやろうというのだね。

L：それがいけないとでも言うのかい。我々のように厳しい受験戦争で他人を蹴落して大学に入ってきた人間は、大学で得た知識を何らかの形で社会に役立てねばならないと思うんだが。

R：まあそれはその位にして。ところで、君は何かというとすぐに労働問題の話をするけど、君は労働問題がこの地上で最高最大の問題だと思っているのかい。

L：そんなことは言っていない。けれども労働問題が解決すれば、この世の中の矛盾は大幅に減ると思っている。

R：僕なんかは、労働問題が全てだ、というような考え方には、大いに反発を感ぜずにはいられない。「全て」派の人間は、結局は物質的な生活の平等を目標としているんだろうが、それが果して幸福と呼べるものかどうか、大いに疑問が残る。

L：しかし、金がなくて暮しに困っている人が多いんだから、福祉行政その他の面から、困っている人たちの生活を人並にまで高めていく努力が必要なんではないかと思う。

R：結局、お前はいつも金銭的、物質的な面からしか物事を把えていないんじゃないか。人間の精神面、幸福か否かという観点に立ってみれば、金持ち必ずしも幸福ならず、貧乏人必ずしも不幸ならずと言えるのではないか。

L：お前のその論理は支配者層が用いる自分の権益擁護の為の論理だよ。清く正しく美しく、貧乏でも幸せですわ、という人間が沢山いれば、金さえあれば幸せという人間にとっちゃあ思うつぼじゃないか。いつの時代でも、清貧の庶民と少数の大金持が存在し続けたじゃあないか。

R：君は僕の発言を曲解しているよ。僕が主張したいのは、自分の内心の安定を得た者にとっては、他人がどんなに金を儲けていてもそれが全然羨ましく思われないということだ。そうなると、もう金持ちとか貧乏人とかいう尺度はナンセンスなものとなり、人間がついに賃金の奴隷でなくなることが可能になると思うんだ。

L：そうかな、しかし、そうした考えに立つ場合、自己の内心の安定さえ得られればよい、自分一人だけ矛盾から脱出できればよいという利己的なもので終わってしまい、社会変革には到達しそうにないと思われるがなあ。

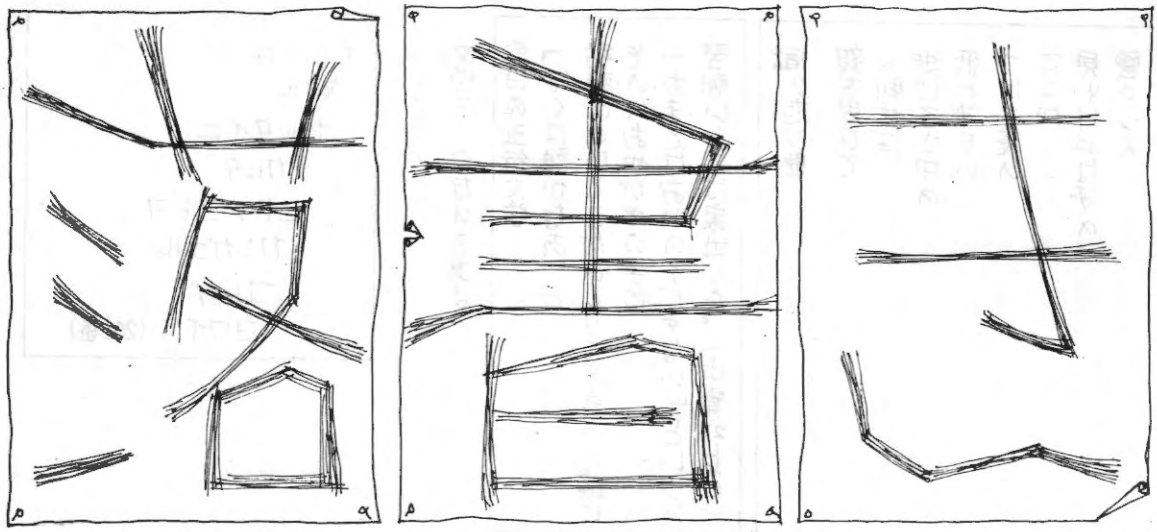
R：やはり社会的に影響力を持つ為には宗教とならざるを得ないでしょうな。宗教ー日本には伝統のー自己の内心の安定を求めるー儒教がある。そうだ、今こそ伝統の儒教を全国民的に広め、儒教のエネルギーによって社会変革を行なうのだ！皆さん、詩吟と武道を習い、お父さん、お母さんを大切にしよう。

（79 L Ⅱ）

ほのかな香りの漂う閉ざされた個室の壁に、あるいはおもしろくない講義が右の耳から左の耳へ通り過ぎていく大教室の机に、溢れている声を我らはみいだす。また、しばしうつつの世を忘れ、自らペンを走らせることもある。「落書き」――この身近なものに、今回スポットをあててみることにした。編集部では独自の調査網により、駒場にある落書きをあつめ、その中からこれまた独自の基準で、傑作、大作、秀作（臭作？）を選んだ。また、東落評掃くめえ左派秀員長による〝落書考〟も併せて掲載する。

駒場を歩いていてまず目につく落書きは、カラフルなペンキで壁や柱に大書きしてある、○○粉砕！というような直接政治的なアジテーションだ。この類は、ハッキリ言っておもしろい落書ではまずない。むろん書く方も別におもしろく書こうなどとしているわけではないし、当然といえば当然だ。ただ、こうしたセクト抗争的なものの中にも、ひとくふうされたものがあって、なかなかおもしろい。例えば、

新発売!! 判「暴力」
イモ判にくっきり暴力の2字！



気にくわない奴になすりつけよう。
キャンペーン中、半額サービス！
提供は皆様の学園生活をクリエイトする
民青同盟でした。
（中寶2Fトイレ）

民青も負けてはいない。

古い駒場のキャンパスに
今日も嵐が吹き荒れる
ルール無用の革マルに
民青の根性みせてやれ
ゆけゆけ民青　東C民青
（中寶2Fトイレ）

小教室の机などには、言葉のあそびのようなものや、生活感をそのまま書いたものがよくある。

峯荘に近づかぬことを宣言する。6/21
53 S I 14 ××（寶2）
（552番）

ねむたいよう
ねむい
ねたいよ
ねむたい
ねたら！
（551番）

落書きなんかやってる奴はバカだ！
落書きなんかおもしろがって読む奴はもっとバカだ！
だからオレもバカだ
おまえもバカだ
（571番）

美保子さよなら
美保子幸せになれよ

法学部がなんだ、理学部の存在を考えろ（中寮2F トイレ）

こんな寮なんかアホカイにでもガキマルにでもものっとられてしまえ。そしてみんな滞納して寮も食堂もつぶれてしまうがいい。それで食っていけない奴は退学するがいい。もう俺なんか下宿してしまうから関係ないもんね。どうせ「エゴイスト」なんて人間の総称なんだよ。これを読んでハラが立った奴は精一杯定員会に協力したまえ。
62期定員会を去るにあたって
（北寮　総務部室）

ざっとこんな調子だ。だが、ときには、もっとシリアスなのもある。

セツルは
ヤメル
ゼッタイニ
ツカレタ
ヒトノコトヲ
カンガエル
コトガ
ヨワイ　（201番）

文学チックなのもある。

今日の五行文学
「ぼくは誰かなあ」と
幼稚園のいとこがひとりごと言った時に
その父おやがその子に
「おまえはおれの子じゃない」というと
翌朝いとこは家出した。（中寮2F トイレ）

指の恋ひ歌
親を思ひて
人刺せば
逃げるさ中の
恋わずらい
つける薬の
ここかしこ
見わけぬはずの
雲のうえ

おやと思へば
あの人が
両手そろへて
心中の
かたわれ役を
こひねがう
うつけまなこで
見たがいて
真に思ふ
人刺して
わがみ残れば
なかなかに
生きる薬の
この憂き世
ゆめゆめみまい
指の恋
（図書館410）

つづいて、短いながらなかなかの傑作一品と、意味なしイエローフレーズ一品。

くだら
かんの
ん
（553番）

元祖うんにょぱんつ
（552番）

男性の場合だと、女子トイレの落書きにお目にかかることはまず無いだろう。男子トイレほど〝盛ん〟ではないが、やはり、あるのである。

東大のすばらしい女性たちよ、私たち女性はもう男性の支配下にはないのです。女性は頭脳でも持久力でも男性よりすぐれているもの。
これからは逆に男どもをねじり伏せ我々の支配下に組み敷こうではありませんか。男とは本来女の収穀たるもの、彼らをその本来の役割に戻してやろうではありませんか。
（図書館3F女子トイレ）
編集部注：「収穀」？（ユラあつめてどうすんの）

多苗子よ、あなたはすばらしい。同性ながら感じちゃう。
①結構体格もよいし
②プロポーションもよい
③表情が何ともいえずうれいがあって今どきめずらしく日本の女を感じさせるわ
④何ともいえず理知的な雰囲気を持っているわよ
本当にすばらしい理想の女性像、多苗子よ、永遠に。（図書館4F女子トイレ）

これらはまともなものだが、女子トイレといっても男子トイレに負けないグロいのもある。
例えば、図書館4F女子トイレには「男性を撃退する法」と題して「まず彼をやさしくベッドに案内する」に始まり、日大XXさん（実名入り、もっとも本名かどうかはわからない）の筆により、かなりグロい内容が連綿と書かれている。最後に
user woman めざして入会希望の方は
OAU本部 03-421-8764まで
とある。
これに矢印して、
「バカじゃないのこの女。女の子は男の人がいないと何もできないのよ。男をたてて平和な家庭をつくるのが女の幸せ」
とかいう〝反論〟もあった。

次は大作。少々ドギツいが、単なるグロい落書ではないので、この際全面掲載する。

←いきがかりだと
ろくにみず
はなをかかえて
にこにこと
ぼくははいった
へやのなか
とてもおいしい
ちょこれえと※

※※あなおるかおは
のうさつさ
おくのべっどに
くみしいて
やさしくすそを
まくりあげ
けもののように
ふるいたち※※

←※リぼんをかけて
ぬすみあし
るびいのめをした
をんなのこ
わたしのことを
かわいいと
よんでちょうだい
たきよせて
れんあいごっこも
それまでよ
つみのないこえ
ねましょうと
ないとがうんを
らふにきて
むねもあらわな
うすげしょう※
（図書館3F男子トイレ）

※※※ここがいそこよと
えつにいる
てるたのおくの
あいのその
さざめくもりに
きすのあめ
ゆきのはだした
めっちゃんの
みつのあまさに
しぬしぬと
ゑみつつもらす
ひくいこえ
もっともっとと
せめたてる
すべてはゆめの
京の夜
（図書館3F男子トイレ）

というわけでいろいろ書いてきたが、最後に傑作二篇をもって終わりたいと思う。

右を見よ！左を見よ！後方を見よ！便所の中でキョロキョロするな！
トイレ愛好会一同
（生協男子トイレ）

よく来たな、まあすわれよ。
（学館男子トイレ）

【酔】

東落評と一口に言っても
様々で、皆主義主張が異なり 対 穏健派の弛緩派、神奈川南部支部、思想的に
過激な怒鳴派、活動面で過激な北神奈川派、硬直派、硬派連合、
政治色の強い反帝派、地縁的な房総族、住吉派、掻くめえ左派
反帝派、好戦派を性質的ときれば 硬直派、硬派連合 右より ともいえます。
神奈川南部支部 は 少女趣味的。ほとんどが教派の集合と称しているのに対し、硬派連合だけは
男っぽさを強調。4

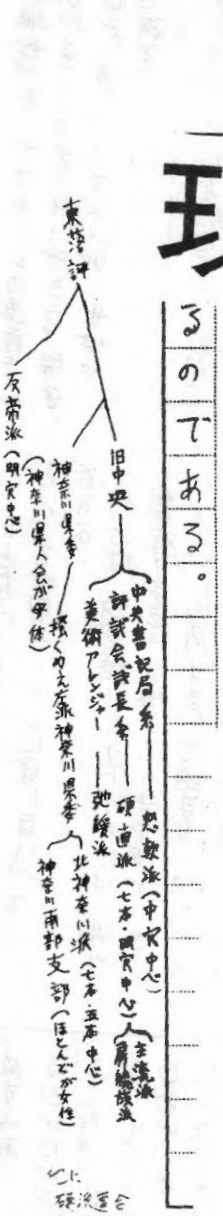
3

現代落書考

―悪名高き東落評の立場から

正式名称は「東京大学落書評議会掻くめい左派神奈川県委員会北神奈川分派委員長」と長いのです

東大落書評議会掻くめえ左派委員長



便所の個室の中に入るということは、俗世間から隔絶した空間に身を沈めるということにもなる。その中にあって、自分はその空間の支配者であり主役である訳で、この小世界の全ての事象は、主人によって認識され創造されねばならず、しかも我儘で自由な創造が許されている。こうして創造され残されたもの、即ち落書は、書いた当事者の自己満足を目的とする物と、次に来たるべき新たな主人を意識した自己表現である場合とがあり、恐らく意図としては後者が圧倒的に多いはずだ。こうした物の中で最も質の良い物は、小世界の後の主人達のイメージを啓発し、新たな創造を生み、この小世界を少しずつ変革していくのである。やがて、次々と生み出され積み重ねられていったイメージは、小さな個室から溢れ出し、外なる大世界をも変質させようと波立つのである。―「便所の落書から縦断乱へ……」―

落書が「他へ向ってイメージを具現化させる一つの場」と認識された時、右の如き手順に依ってラディカルでなくとも、なんらかの変革が可能なのではないか。そうした信念に基いて我々は東落評に結集したのである。（筆者が参画したのは東落評結成後やや後のことではあるが）

しかし、人間のイメージが無限であるのに対し、便所の壁面は有限である。ところが、うまくしたもので、こうした落書はやがて人為的に消去されるか、自然に磨滅するかして消滅していき、またそこに硬派連合 住吉派 好戦派 房総族 住吉派 筆者

の上に新たな落書を描き得るのである。即ち、有限なる空間が無限なる時間の手を借りて、無限のイメージを包括し得るのである。そして、当然ながら落書は個室の壁に限ることはない。人が全き個人となれる場所は全てイメージの具現化の場となり得るのである。

そうしたことに気付いてもらおうにも、我々の組織はあまりに貧弱で影響力が小さい。そこで我々は、かの悪評高い東落評名派の自己宣伝をやって来たのである。便器の内側から女子トイレの個室と、奇をてらうまでに東落評の名を書きまくってきた。（うちには女性もいるが女子便所に書いたのは男性である――念のため）実に、便器の底までが落書によって、政治的あるいは芸術的なイメージの発現の場となりうるのである。事実、そうまですることによって東落評の名は駅場内に広まった。こうした方法でかくも短期間に名が広がるということは初めてのケースではないだろうか。我々の中には、せめて週刊朝日のデキゴトロジーに載るまでは、この悪辣な自己宣伝を続けてい うとする動きもある。すでに我々の情宣行為は他大学の壁へも及んでいるのである。

我々の目的は面白い落書を書くことではなく、このような素晴しい世界のあることを紹介し、人々のイメージを触発することなのである。（勿論、我々が常にその事に成功しているというつもりはない。）

以上、本来雑多な人間の集合であるところの東落評の中のできるだけ共通な部分を述べたつもりであるが、ここで念のため、他派（辺縁書記局）の主張を紹介したい。

死んだ時計台の針を今日も見つめる貴方に

我々は、やさしい羽毛で雁字搦めにされている。制度的に、肉体的に。我々は、あまい香りで泥酔させられている。日常的に、精神的に。

XX（バッバン）に刃向い、これをくつがえす方法は、既成習慣の起源にまでさぐり入ることによって、その習慣が何らの権威をも正義をも持たぬことを明示し、この習慣をぐらつかせることにある。

――パスカル――

眼（まなこ）を閉ざすな。動眼神経、大脳皮質に弛緩を許すな。したたかに感性を磨ぎすませ。そして無限大に射散せよ。

ヤッチャイナ！ヤッチャイナ！ヤリタクナッタラヤッチャイナ！

――ピンク・レディー――

奴等みたいに無表情な冷たい壁に、己の熱くそそり立つイチモツで刻印せよ。さらにその刻印に精を吹き込め。

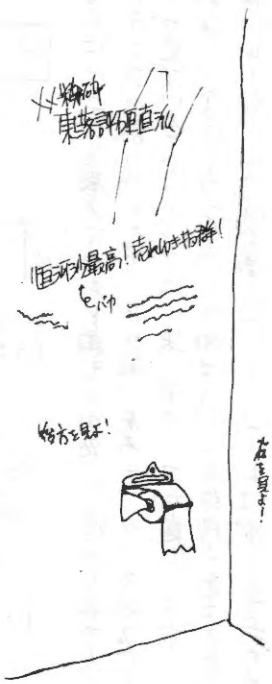
東大落書評議会。

組織的構造なき組織。中核なき組織。指導部なき組織。己が組織員であることを言いさえすれば組織員足り得る組織。

「便所の落書から絶叫乱へ」

「全ての軌派は東落評に結集してから離散せよ」

東大落書評議会辺縁書記局



テニスを考える

その1

村磯金得

今、物凄いテニスブームではないだろうか。街を歩けばテニスラケットを小脇にかかえる女の子であふれているし、どこのテニスクラブ、スクールも満員で大盛況と聞く。東大でもテニスのサークルは数多くあるし、体育のテニスもかなりの人気である。ぼくがはじめてラケットを手にしたとき(S47)もテニスブームだったが、テニス人口は80万人程で、500万人以上と言われる現在とは比べものにはならない。現在、テニスをする人は、馬鹿みたいに多いのである。

最近のテニスブームを見て思うには、技術的な面よりもファッション性の方が先行してしまっている観がある。テニスクラブに行けば、皆、高級なウェアを着こみ、ファッションショーではないかと思ってしまうし、彼(女)らの技術的内容はあまりにおそまつである。いったいテニスの何を楽しもうとしているのか全くわからない人々が実にたくさんいるのである。ラケットを持って外を歩いている学生、OLは本当にテニスをしているのだろうか。テニスを社交として位置づける人がいるが、それならそれなりにテニスのプレーも存分に楽しんでもらいたいものである。ところでどうしてこんなにもブームをよんでいるのであろう。ファッション性の先行からその格好よさにひかれてはじめる女の子が多いようだし、そういった女の子が目につくものだから(不純な動機で?)はじめる男も少なくないように思われる。スポーツというイメージから遠くかけ離れた所で流行している気さえするが、動機がどうであれ、スポーツをするという意識のもとにテニスを楽しんでほしい。

最近ぼくにテニスを教えてくれと頼む人が多い。昔から外で人に会う度にテニスの話しかしなかった功罪であろう。テニスのプレーをはたから見ている人にとっては、決してテニスが難しいスポーツには思えない。なにしろラケットの面はバットの何倍もあるのだし、ネットはバレーボールのほど高くないし、コートはボールを打ち返しには充分広々としているのである。ぼくの友達にもそう信じている他のスポーツのベテランが多くいる。しかしそういった人々もいったんラケットを手にすると、球を飛ばすのにいかにラケットの面が小さく、球が飛ぶようになればいかにコートが小さいか、いとも簡単に知るのである。そしてぼくは他のスポーツでは受ける相手にこう言ってやるのである。

「おや、そんな有様で彼女とテニスをすることを本気で考えているのかい。」

ぼくがテニスをはじめたのは中学一年の時である。初日クラブの先輩がやってきて、「さあ素振りをしてごらん。」と言う。初心者は皆、素振りをはじめた。先輩は一人一人欠点を指導していく。さあぼくの番になった。先輩は何も言わず、じっと見ている。初心者にしてはできすぎたスイングなのかな、ぼくはこうえきれず、「どうです、こんなもんでいいのですか。」「手のつけようがないね、ぜんぜんだめだ。」

人前に出てはずかしくなく打てるようになるのに3年ほどかかった。そうテニスはやさしくない。高校では美術、映像方面に目を向けたせいでテニスはせず、再び本格的にはじめたのは今年になって

からである。時代の流れに乗ろうと、日本の旧式打法からアメリカンに変えてみたもののあまり上手になったとはいえない。しかし、実質4年目ということで、その面白さはどこにあるのか少しずつわかってきた気がする。

テニスは自分だけがたよりの個人競技であり、同時に必ず相手のいる対戦競技でもある。その意味で、団体競技であるサッカー、バレーボール等と異なり、自然が相手であるスキー、水泳といった類の競技とも異なり、剣道、柔道といった類の競技とよく似ている。この一対一という競技形式は、奇妙な形で心理的ストレスがかかりやすく、時として相手の精神状態あるいは性格までもがゲーム中に暴露されることがある。そのおかげでぼくはいろいろな人と巡り会えた。

D君とテニスを先日することになった。彼はヘアバンド、リストバンドをつけ、ウェアはフィラ、くつはディアドラ、ラケットはドネーのオールウッド、まさにボルゲさながらの格好であらわれた。最初のセットで彼はぼくをリードしたが前の日が雨天なのがまずかった。ぼくはボレーを打ち、泥まみれのボールが彼の服にあたってしまったのだ。その後の彼は試合を放棄したのも同然だった。

K君とゲームをすることは難しい。彼の打つボールはおそろしく速く、しかもコートにはいってくれないのである。乱打を続けるにもぼくはベースラインから16mもさがらなくてはならない。そしてぼくが打ち損じたりするとにやりと笑って、ぼくがこう言うのを期待しているのである。

「君の球はなんて速いんだ。内心びくびくですよ。」

S君とある日テニスをしていた。その日はいつもとちがい彼にミスが多かった。ミスをするごとに新しいラケットのガットをいじくり、ガットのせいだといわんばかりの顔をしている。そしてついにはラケットのせいだとフレームに手をあて、ぶつぶつと文句をいっているのである。次の日、彼はさらに新しいラケットを買ってコートにあらわれた。

H君はひどかった。試合前、「このコート、クレーじゃないか。オールウェザーでないとね。」ゲームがはじまり、「むかい風か。」けだして、「なんでおれがサーブの時だけ日が照るんだ。」試合後、「実はね、昨日ちょっと飲みすぎてね…」

ひどい例ばかりあげたが実話である。悪い場合に限らず、どんな人とやっても相手のみえてくるのがテニスの一つの面白味といえる。この点を少しほり下げ、ぼくにとってテニスの面白味は何なのかを考えてみる。

面と向かい合ってプレーしなければならないのがテニスであるが、実力が伯仲している時にそのおもしろさは増す。プレーに過熱し、せり合い、夢中になればなるほど相手も私もその本性をむき出しにする。白熱した様々な場面で様々な対応を見せるのである。それはまさに人生の縮図のようでもある。

テニスはスポーツであり、スポーツは娯楽であるから、楽しまねば意味がない。テニスをする多くの人々は、大学のクラブ員であるとか、毎週のトーナメントに出場するプロではないのだからゲームで勝つことに大きな目的があるわけではなく、楽しむことに大きな目的があるはずである。テニスは所詮楽しむ遊びにすぎないのだから、そのおもしろみは人生の真似事にあると思う。ゲームにはその勝敗の中に逆転があり、自滅があり、運、不運があり、そこに興奮、喜び、悲しみが生ずるのである。しかしそれは遊びであり、人生そのものではなく、真似事なのである。だがゲームの最中に我々は本気になって、プレーし、遊びにすぎないという意識は決して捨てない。ゲームの中では全てが人生そのものであるかのように感じられ

る。こういったことがゲームの本質的部分であり、勝負の面白さであると思う。確かにトランプなどのゲームはテニスにとってかわることができるような気がするかもしれない。しかしテニスはあくまでスポーツである。心と体が調和してこそおもしろみ、楽しさが湧く。楽しいからこそテニスは続き、我々の肉体、精神をきたえてくれるのである。

何だかんだと思いつくまま書くうちに支離滅裂になったみたいだが、さて、現在ではボルグ、コナーズといった世界一流選手の試合を日本でじかに見ることができる。しかしそういった選手と日本の選手とが互角にたたかっているのを見たことがあるだろうか。ここ数年日本のテニス人口は急増しながら日本のトップは世界のトップからどんどん離れている。これは日本人として大変残念なことである。これからの日本の選手に期待しているのがぼくの今日この頃である。

(79 S II)

お待たせしました——

奇怪 **クロスワード** NO6

こたえ

ア	イ	デ	ン	テ	イ	テ	イ	／	ア
マ	リ	モ	／	ナ	／	ツ	／	ポ	ン
／	ア	／	カ	ン	ト	／	フ	／	パ
ケ	イ	ヒ	ン	ト	ウ	ホ	ク	セ	ン
イ	チ	／	ケ	／	セ	キ	リ	ン	／
モ	／	ハ	リ	ス	ン	／	ケ	エ	キ
ウ	リ	ネ	／	マ	カ	ナ	イ	ツ	キ
シ	／	ダ	ツ	コ	ク	／	サ	／	カ
ソ	ラ	／	ミ	／	ジ	ソ	ン	シ	ン
ウ	／	ア	キ	マ	ツ	リ	／	シ	／

応募総数3名 全員正解

毎度おなじみの難解さに加え、編集部の不手際もありお騒がせ致しました。
しかも、ああ、ヒトダマは赤リンではなく、マリモと言えば阿寒湖、そして決定的ミスは松野先生を当選確実としたことです！平身低頭のほかなし。

それにもめげず当選の方々は——

1等 古関恵一サマ
2等 石塚方子サマ
3等 木村彰一サマ

ぼくは日大生

高橋　晋

ぼくの文章がこのような形で『直河』に載ること自体、個別文学の相異を乗り越えた、学生総体が形成している情況の1つの反映なのかも知れません。と言うのは、何を隠そう二の原稿は、江川と山林なみのトレード（不等価交換）の上に成りたっているからなのです。早い話が、日大で『めざき』という日和見主義的（？）学生新聞の編集に関わっているぼくが、「原稿が足りない？」と言ってうなっているウシミツドキに、貴誌編集部のZ君から電話があったのでした。そこで、"お互いがお互いに、原稿を書いてもらいたがっている"という恐ろしい現実が双方で確認された時、二の無残なトレードが成立してしまったのです。（ぼくが1600字以上、Z君は576字書くという合意事項だった。）

さて、これからぼくは、その『めざき』編集委員会に関わりながら感じたことを書こうとしています。創刊当初から現在に到るまで約15ヶ月という時間が経過しているわけですが、その間、一番つれしかったのは新しい仲間が加わった時であり、なんとも形容し難いのが仲間がやめてゆく時でありました。「やめる理由」というのは大方共通していて、例えば次のようなものです。

「私たちは学生の立場に立脚し、数々の報道や学生間のコミュニケーションをはかったり、大学当局への批判等を繰り返してきた。しかし、それでは自分はやっていけない。私たちに"学生"という立場があるのと同じく大学当局、教授会にも各々の立場があり、それぞれがお互いの立場を理解しあい、協調していく姿勢こそが大切ではないのか。」

しかし、敢えて"日大闘争"を引き合いに出すべくもなく各学部によってその様相が多少異なるにせよ、今もなお日大当局は巧妙な学生管理と暴力的学生管理を諸手に振りかざして、ぼくたち学生と相対しています。

我が経済学部にあっては、前者の「巧妙な学生管理」（御用派学生組織のデッチ上げや、検閲・検閲体制）によって、学生は"異常の日常化"を強いられ、感性は加速度を帯びてマヒし「去勢」されていくかの如くであります。そんな中で主体性の発露を見出そうとすれば、ぼくたち編集委員がシコタマなめさせられている"苦さ"を味わわなければならないのです。

例えば、先日こんなことがありました。編集委員になったばかりの女の子が帰省してみたら、学生課から親元に、次のような電話が数回あったというのです。「お宅のお子さんは、『めざき』編集委という団体に入っている。二の新聞は、大学のルールを守らないばかりか、内容も大学当局に批判的であり極めて好ましくない。両親からお子さんになんとかやめるよう説得してくれ…」おまけにぼくたち編集委員の私生活レベルをも含んだ描写を、とってもなくリアルにやってのけたということでした。おかげで彼女は親に四六時中監視され、幾度となく「説得」されたあげく、1ヶ月前の生き生きした言葉とは大凡かけ離れた内容の手紙を送ってきました。それは前述した"一般的やめる理由"プラス「恐怖心反省」だったのです。

二の事件は（以前にも似たようなことは度々あったのですが）ぼくたち編集委員が多かれ少なかれ日頃から抱いていた「恐怖心」を一層かきたてるという結果を生んだわけです。今「歩のところで"普通の大学生に戻りたい"」という解散宣言をするには到っていませんが…。そしてまた、彼女のみならずぼくら自身も自己の主体性・思想性といったものと現存在との間の矛盾、更には分裂という危機に常にさらされている、そういった現実を直視せざるをえないでしょう。

『ぼくたちは王子や三軍塚の闘争に参加した。しかしデモから帰ると平和な研究室があり、研究できるというのはたまらない欺瞞である。研究室と街頭の亀裂は両者を行復しても埋められない。』

（「知性の叛乱」山本義隆（東大全共闘議長）著より）

地味なようで派手だと思う 陳斗鉉さんを救う会に参加してきて

林潤一

陳斗鉉さんの名を知っている人は結構いることと思う。そして救援運動のあることも知られているだろう。しかしぼくたち救援運動をしている者がどういうことを考えてきたかについては、ほとんどの人が知らないのではないだろうか。とは言えこういう現状は僕たちにとってはかえって居ごこちがいい。なぜならみんなが遠くから暖かく見守ってくれるから。あの人たちは偉いねと。しかしこれでは近づきがたいのではないか。現にメンバーはあまり増えていない。もっと僕たちの気持ちを開かなければならないのではないかと考えるようになってきた。もっとも僕たちの気持ちと言っても一人一人バラバラで、もともといろんな考えの人が集まってきたのだから同じはずはない。だからここで述べるのは僕個人の気持ちである。僕個人の気持ちを伝えるのに高校のときはあまり不自由を感じなかった。学年の誰とも顔見知りであったが、大学では話が違う。これではいろんな活動はしやすいが相互に広がっていくことはない。桓河沙を読んで、ここなら書きたいことが書けると思った。まず陳さんについてあまり知らない人のために事件の概略を示し、次に僕、場合によっては僕たちが、運動の過程でどんなことを考えてきたのか、そして現在考えていることを述べたい。

1 陳斗鉉氏の事件の概略

陳斗鉉氏は在日韓国人であり、日本で在日韓国人の組織で親朴派の居留民団の幹部を勤めるかたわら喫茶店を経営していた。陳氏は一九七四年十月一日、韓国に渡っていたところを、朝鮮民主主義人民共和国（以下北朝鮮と略）のスパイとしてKCIC（韓国陸軍保安指令部）に逮捕された。陳氏の容疑は、北朝鮮に二度にわたって渡航し、スパイ教育を受け、韓国にスパイとして潜入したというものである。しかしその証拠として上げられたのは陳氏の自白だけであった。

その後陳氏が北朝鮮に渡っていたと言われる時期には日本にいたことを示す証拠が数々発見され、東京弁護士会はこれらの証拠をもとに、陳氏の無実を証明した。またこの事実により陳氏の自白が拷問や脅迫によってなされたものであることは、他の多くの政治犯の拷問を受けたという証言からも明白になった。

しかし裁判では「自白」を唯一の証拠に一審、二審と死刑判決が出され、一九七六年二月十日、三審で死刑が確定した。すぐに再審請求をしたがこれは凍結されたままで、いつでも執行できる状態にある。私たちはこの間執行だけは阻止してきた。

2 運動の過程で考えてきたこと

陳さんをスパイに仕立て上げることによって朴政権が何をねらったのかは明白であった。朴政権は政権維持のために民主化運動を弾圧してきたが、その口実として常に「北の脅威」が上げられてきた。この「北の脅威」を実証するものとして陳さんがスパイにデッチ上げられたのである。スパイ容疑で捕えられている在日韓国人はわかっているだけでも60人以上いる。なぜ在日韓国人が狙われるのか。日本にいれば北朝鮮の人々と接触しようとすればできるし、言論の一定の自由の下で左翼思想に触れる可能性がある。本国の人々もそう思い、スパイさもありなんと考えて在日韓国人政治犯は孤立する

からデッチ上げやすい。

またなぜ我々日本人が韓国人の救援運動をするのか。第一に歴史的背景である。韓国人・朝鮮人が日本に多く住んで生活しているという現状を作りだしたのは戦前の日本の朝鮮支配であり、その結果と言ってよい南北分断である。だから日本政府には在日韓国人・朝鮮人に対する責任がある。しかし問題なのは過去の清算だけではない。第二の点として我々が現在の日韓関係をどうとらえ、変えていくのかということがある。つまり在日韓国人政治犯を生みだしたのは朴政権であり、それを支持する日本政府である。そして日本の状況は日韓関係に根ざすものが非常に多い（例えば生協には安い韓国製品が多い）。日本人自身の解放のためには日韓関係を変えることが必要である。とは言え日韓関係を変えることにストレートにとりくむ運動には限界がある。現在の日韓関係のはざまで苦しみたたかっている人々、例えば在日韓国人政治犯の投げかける個々の問題から出発してこそ、日韓関係を変えるのに腰のすわったことができるのではないか。

以上のことは救援運動の早い時期から考えてきてはいた。しかし実際の運動にこれらを具体化するにはかなり長い時間を要した。特に後半については今なお中心的課題である。以下時間を追って考えてきたことを述べるが、ある時期に考えたことは次の時期に否定されたのではなく、積み重ねであり、かつて考えたことは現在までも運動に脈打っていることをあらかじめ言っておきたい。

① 助命嘆願の期間

救援運動は一審死刑判決（一九七五年四月）を受けて始められた。陳さんの次男、栄浩君の母校であり僕の母校である教育大付属駒場高校（以下教駒と略）を中心に、教職員、父兄、生徒自治会が助命嘆願の署名を集めたが、陳さんが無実であることを訴えることはしなかった。これは減刑に対する期待により、無実を訴えることで当局を刺激するようなことはしない方がいいという考えと、この躊躇により陳さんの無実に対する認識が広まらなかったことによる。

② 無実を訴える

二審死刑判決（一九七五年九月）は運動の状況を変えた。このままでは三審での逆転はむずかしいという認識から、陳さんの無実を広く訴えていくことを確認した。この転換を勇気づけたのは、崔哲教氏の救援会の活動である。崔哲教氏は陳氏と同じケースでもっと早くスパイにデッチ上げられ、既に死刑が確定していたが、救援会と家族は勇気をもって無実を訴えて運動していた。陳さんを救う会はこの時期に実質的な活動を開始し、初めて駒場や渋谷の街頭に出て署名活動やビラ配りをした。また新聞への投書に対する反響から全国的に支持者が広がった。また崔氏の事件を中心に陳氏についても扱った映画「告発」の上映会での訴え、そして私たちによる「告発」の上映などを行ない運動は広がっていった。

無実を訴えることはそれ自体朴政権の罪状をあばくことになる。僕は当時このことで十分韓国の民主化斗争と連なっていると考えていた。また無実は日本政府に陳さんの救援を求めるときの強力な論拠となり、一九七六年一月三十一日には衆議員予算委員会で政府は崔さん、陳さんの人権救済に努力することを約束した。しかし同年二月十日、三審で死刑が確定し、運動は長期戦に入った。その後無実の人が殺されようとしていることに対する憤りにとどまっていては限界があることが認識されてきたが、それは少くとも僕にとってかなり時間のかかることだった。また僕たちに、栄浩君の学友という立場に基づく運動から先へ踏み出せない傾向があったことも事実だ。暗中模索の僕たちに道を示したのは、僕たちとあまり年の変わらぬ在日韓国人青年の政治犯たちの生き方だった。

③ 僕自身の生き方を考える

戦後三十年がすぎて在日韓国人も既に二世、三世の時代である。彼らは日本で生まれ育ったために祖国の言葉を話せず、民族としての誇りをともすれば失う。分断された祖国の現状はこれに輪をかける。しかし彼らの中には、民族の誇りを求めて祖国に留学し、言葉を学び、永住して誇りうる祖国をつくるために働こうとする者がいた。しかし朴政権はこれらの青年たちを北朝鮮のスパイに仕立てて「二・22学園浸透スパイ団事件」を発表したのである（一九七五年）。その後、白玉光、李哲、康宗憲氏らへの死刑判決をはじめ、重刑の判決が続々と出された。だが彼らはスパイに仕立てられたという受け身の立場にとどまってはいなかった。裁判の過程で、彼らは人間としての尊厳を守るため自らを朴政権に対峙させていった。李哲、康宗憲氏は法廷で拷問の事実を暴露し、上告理由書で李哲氏は「死刑はKCIAに与えられるべきだ」と述べ、康宗憲氏は「二十五才の身で大韓民国の法律によって最高刑の宣告を受けたことは限りない栄光であると考えます」と述べたのである。

彼らはこのように民主化斗争に現実に連なっていき、自らの生きる姿を僕たちに投げかけてきた。僕たちは自分の生きる姿勢において救援運動にかかわっていくことを動機づけられた。そしてこのような人々の救援運動をすることは、単に人の命を救う以上の意義を持つことを認識していき、彼らの生きる姿勢に応えうるような運動をつくっていきたいと思うようになった。

④ 全国会議の結成、そして僕にとっての停滞

時期は前後するが、この間「二・22事件」をはじめとした救援会と、「告発」上映運動を通じてできた支援団体が全国的に結成されていた。そこでこれらの救援会と支援団体をまとめて「在日韓国人『政治犯』を支援する会全国会議」が一九七六年六月発足した。「全国会議」は韓国大使館や外務省に対するデモをはじめとする様々な活動を行なった。

また教駒では僕たち運動をになう者の質を形成するため、日韓問題にかかわってきた人たちを呼んで数回の懇談会を行なった。この懇談会で得たもの、そして前述の在日韓国人青年たちの生き方に触発されたものを通じた僕の日本人としての生き方に基づいて、陳さんの救援運動を行ない、全国会議の活動に参加していくこと、これが当時必要だったことだと思う。しかしこれらのことを整理せずに惰性で参加していき、受験を前にした中断に至ったことは僕にとって考え直されることであり、これから運動を続けていく上でも右のことは重要な課題である。

⑤ 東大での運動、東大の体質を衝く

一九七七年四月、東大に「無実の陳さんを救おう！東大の会」が、一橋大に「陳斗鉉さんを救う一橋大学の会」が結成された。以下僕の知っている東大の会の運動について書こう。東大には陳さんの二男、栄浩君が在学していることは高校の時と同じであるが、僕たちはしだいに栄浩君の学友という立場から先に踏み出していった。

かつて東大で学習、研究をした韓国人が十人も韓国でスパイにデッチ上げられている。さらに東大は、韓国大使館に韓国人、朝鮮人の名簿を提出していたことがある。そして現在、原理研は日本の警察と通じてKCIAへの情報提供を行なっており、この活動は東大によって実質的に黙認されてきた。これらの事実は東大の体質そのものが先の十人のスパイデッチ上げを許し、韓国の民主化斗争に敵対していることを意味しないだろうか。僕たちは日本人の問題としてこの東大の体質を明らかにし、変革していこうという視点に立って東大関係韓国人逮捕者の救援を考えている。しかしこの視点が一人一人の内に確立されるにはかなりの時間がかかったため、実質的な救援活動は始まったばかりと言っていい。

⑥ 政治犯の非転向の姿勢を支持する

崔さん、陳さん、そして「11・22事件」の青年たちの刑も既に確定していた。しかし裁判が終われば政治犯の斗いが終わるのではない。獄中で政治犯に対して常に転向強要が行なわれていること、政治犯たちはこの転向を拒否することで朴政権と斗い続けていることが認識されてきた。死刑判決を受けた人々は日々を死と直面して生きている。彼らに対し減刑をエサに転向が強要される。また有期刑者にとっても、社会安全法という法律により、刑期満了後も「危険人物」と当局に見なされた人は引き続き拘束されるため、釈放は大きなエサになる。またここでいう転向は単に紙切れを書くのではなく、罪を認め朴政権に忠誠を誓いその手先となって働くことを意味していて、現にそうなった人がいる。

陳さんら政治犯はこうした転向を拒否することで朴政権と斗っているし、民主化斗争に連なっている。もとより韓国内の政治犯は多くが確信犯である。在日韓国人政治犯の無実を訴えるだけでは国内の政治犯に直接連なるには壁があり、日韓関係を変えているカとしても弱いものがあった。この壁を在日韓国人政治犯の人々が、自らつき破ったのである。僕たちは政治犯のこの非転向の姿勢を支援することで、民主化斗争により連なっていくことができると思う。

獄中の政治犯はさらに前進している。李哲氏と同房だった本国の政治犯が何人も、出獄後氏の担当弁護士に、彼はしっかりしたやつだからよろしく頼むと言っていく。康宗憲氏に獄中で自作の歌を教わった本国の牧師が、釈放後祈禱会で在日韓国人政治犯の支援を訴えてその歌をうたうなど、本国の政治犯と具体的な形で結びつきつつある。僕たちは彼らに応えて、日本人としてどんな運動をつくっていけるだろうか。そしてどう日韓関係を変え、日本を変えていけるだろうか。まだはっきりとした形はつかんでいないが、僕にとっては当面僕の在るこの東大というものに取り組んでいくことに道があると思う。

具体的な救援活動として今救う会のやろうとしていることは次の二点である。第一に陳さんと東大教員の面会、死刑囚は親族以外は面会できないので、外務省を通じて交渉し、公式な面会にもっていく(前例あり)。第二に東大総長から朴への釈放等要請文。これらは現実的効果とともに、前述のよ体質をもつ東大にそれを変えていくような行動をとらせることにもなる。

⑦ 文化を考える、コンサート集会

去年の秋、救う会は二回(内一回は駒場祭で)のコンサート集会を開いた。今年も駒場祭でコンサートを開く。最後にこのコンサートについて僕の考えていることを述べたい。去年は白竜と高橋悠治を呼んだ。白竜は在日朝鮮人としての自らの存在を前面に押し出して歌うことにより、僕たちの心を開かせる力を持っている。高橋悠治はアジアのたたかう民衆の音楽を日本に伝える活動を行っている。先に救援運動が僕たちの生き方にかかわってくることは述べたが、生きる姿勢を変えていくカとして、白竜や高橋悠治の生き方、および彼らのつくる文化は大きなものを持っている。そして僕たちは僕たちの生き方をあらゆる方向から変えていくような文化を作り出したいと思う。

今年の駒場祭のコンサートは白竜と中山ラビ。十一月二十五日(日)、五時半から二三四号室でやるのでぜひ聞いてほしい。また救う会に参加したい人は、この時でもいつでも言ってきてほしい。

(79 L II)

来月の標語

二千円

水で割ったら

二百円

『女子大生』という言葉にあなたは何を感じるか

堂前 標

9月24日は、'79文I・II8組のクラス遠足が行われる予定だった。試験後のひと息つくクラス親睦の場として、クラス合宿のかわりに、合宿委員と自治委員が計画したものだった。

ところが試験最終日の9月22日、突然計画者の方から、クラス遠足は武蔵野音大の女性との合同ハイキングになった、と発表があった。

8組には自分も含めて3人の女性がいるが、計画者の方からは何の相談もうけておらず、一方的に決定されたことだった。

―こんな無神経なことが許されていいのか。我々3人は不必要だ、来るな、といわんばかりに無視されて、クラス活動から締め出された。―3人は、ある者は寂しく思い、ある者は憤慨し合宿委員に抗議に出た。委員からは謝罪というより「しまったあ、まずかった」といった表情を得ただけだった。「まわりの者が、合ハイにしよう、女の子たちもクラスのみんなも乗り気じゃないみたいだし、というので、まずいとは思ったが、勝手に決めてしまった。」という弁解と共に。

―クラスから私たち女は無視されてるんだ、もうクラスの活動には一切参加するまい。―3人はそんなふうにまで思った。―でも、ここで遠足に行かなければ、クラスの男たちの思うツボだ、うるさい邪魔者ぬきで楽しく合同ハイキングにされてしまう。―そう考えて、用事で行けない一人を除いて、自分を含めた2人は、合同ハイキングに参加することにした。―これはあくまでクラス遠足なんだ。―そう言いきかせて。

当日やって来たのは、ほんの十人ほど。クラスは全員で57人いるから、30人か40人は来るものと思っていたので拍子抜けした。どうやら、相手が7人なので、合ハイということで人数をしぼったらしいことがわかる。

我々が行ったことで合同ハイキングの雰囲気がぶちこわしになり険悪な空気になるかと心配もしていたが、そんなこともなく、相手校の人たちと話もできて、その点では楽しかった。武蔵野音大は女子大ではなく、少数だが男子もいるので、ほかの大学の男子からのお誘いがないそうで、東大の女性は他の大学からお誘いはないんですか、ときかれて、男は女より優位に立ちたがるから東大の女なんか女じゃないというわけでそんなのない、といった話から、女性差別問題を話したりした。中には我々女性が気に入ったから、と仲よくなった人もいて、何のために合同ハイキングに来たのか、といった人もいた。

うちに帰ってから、他のクラスの女性に事件のことを話してみた。かえってきた反応は一様に、「ひどい！ショックだ！無神経だ！許せない！」といったものだった。自分は初め、クラスの他の2人のように怒りが爆発しなくて、仕方ない、我々はどうせ余計もんなんだな、というふうに変に諦めているところがあったので、これはいけない、自分は怒りの感情を失くしてしまったのだろうか、とこわくなってきた。

よそのクラスやクラブの話をきいてみて色々実態がわかってきた。

あるクラスでは、クラスタイムで「合同コンパやろうぜ」の声があがったが、「このクラスには女子もいるんだから、クラスタイムの時間にするべき話ではない」と男子からの発言があり、やめになった。

あるクラブでは東大女性は一人で女子大の女性にのっとられた形になっている。合コンクラブという評判で、中にいる東大男性もその気でいる。クラブ内の女子大生と合コンの話をまとめ、嬉々として得意になって話している。そこで唯一人の東大女性がアスッとして不機嫌になってストライキをおこしていたところ、男性の先輩が「どうしたんですか」と声をかけたので、わけを話し、「私は東大の学生として当然このクラブに入る権利がある。このクラブは女子大生にのっとられて、東大女性が入りにくいが、私が入って一人でもいれば、来年から入りやすくなるだろう、と思ってやってるのに」と抗議すると、その先輩もおこってくれ、「クラブの中で合コンをやるのはよそう」という話になった。

あるクラブではやはり女性一人で、クラブとして合コンをしようという話がもちあがったが、中に2・3人「ぼくは、このクラブに女子もいるんだから、合コン行きません」と言ってくれた人がいるから残っている、でなければ怒ってやめたろう、という話もきいた。

あるクラスではやはりクラス遠足の計画をしたが、当日になって他の女子大生が来ていた。そんな裏切り行為があった。

またあるクラスでは女性が一人で、クラスの男性のために合コンの計画をさせられ、自分の楽しみは皆無なのに、金を払って合コンにも行き、献身的奉仕をしている。それなのに、ふだんは話もしてもらえない。いいように利用されている。本人の弁によれば、そうでもしないと女一人でかえって孤立して無視されるので、仕方なくやったのだそうだ。本人はまるでまるで楽しくないし、自分のためには何もなっていない、という。また合コン自体くだらないものだとも思うといっていた。男は遊びのつもりで、すぐ捨てるんだ、などと広言するものもいて、女の方はけっこう本気で来てしまい、ああいうのは女が不利だ、とも言っていた。

話をきいてみて、これは問題だ、問題にすべきだ、と思うようになってきた。我々女性は大学内においてどのように見られているのか。そのことがまず頭に浮かんできた。そして今回の、クラス遠足が合ハイにされてしまった事件では、民主的でないやり方を問題にすべきだな、と思うようになった。

そこで、8組の3人の女性は、問題をうやむやに終わらせないために、クラス全員を集めて、不当な扱いをうけたことに対する抗議と、話し合いをしよう、と計画した。

話し合いには、遠足を計画した委員も含め、54人中20人余りの男子と、女子3人が参加して行われた。

まず、非民主的に、女子3人を無視して、また男子クラス員にも相談せずに、合ハイにしたことを抗議し、反省を求めた。

計画者側の釈明によると、合ハイにしてしまったのは、多数派の男子の一人として無神経だったかもしれない、女性が来にくくなるのは当然で、配慮が足りなかった、ということだった。

なぜクラスのみんなに相談せずに一方的に決定してしまったのか、という質問に対しては、日程もつまっていたので、一部の合ハイやろう、の声にしたがって、クラス遠足の希望者は少ない、と思いこんで、独走してしまった、ということだった。クラスの男性も希望者が少なくあまりこの話にのってなくて、女性も、行きたがってるようなのは一人で、参加意志が少なかったようにみえた、というのだ。

これは全く勝手な思いこみでしかない。非常に非民主的だ、と追求した。なぜ参加意志を確かめなかったのか。行きたがってた者は、男にも女にも多かったのだ、実際は。女性の参加意志が少ないから、

という理由で有志の合ハイの希望をとり入れられては、もし全員行くと言ったとしても、57人中3人なのだから、少数ということをきめ手にするなら、3人を少数とみなしての切り捨ては自由にできることになる。クラスでやろうと言い出したのに、こんなことをするのは、潜在意識的に女は邪魔だ、と思っているのではないか。

とにかく結果的には、クラスの活動としては合コン、合ハイをやらない、ということでクラスの合意を得た。

次に、クラスの男はクラスの女をどう思っているのか、女は疎外されてるのではないか、ということについて一人一人意見をきいてみた。

みんな共通に言っていたのは、意識的に疎外したり無視してはいない、ということ。そうであることを心から期待するが、本当は、意識せずに疎外するようにつくられてきてしまっているのではないか、と思えて、非常にこわい。男も女も、育てられる過程で、ほとんどの部分「つくられて」しまうのだ。固定観念に合わせて。

差別とかそういうことなしに、やはり男と話すときとでは、女に話すときは差を感じてしまう、気をつかってしまう、ということは、区別されてる、ということだから、疎外感がつきまとう。

疎外というなら、何も女だからということでなく、クラスの中でいくらでもあるわけで、何でも「女だから」と考えることは、被害妄想だ、という意見も多かった。確かに、クラスの全員と話をしたり、仲よくしたり、ということは不可能だろうし、自然とそりの合う者どうしグループになっていくだろう。むなしい大学生活の中では、女も男も疎外感を抱くだろう。しかし、男どうしならそりが合う合わないということだろうが、女とのことになると、それ以前の問題として、何かあるのではないか。

例えば、男は、ふだんつきあってない男と話すことは考えられるが、ふだんつきあってない女と話すのはちょっと抵抗がある、とか。

自分としては、なるべく女だけでかたまるのはよそう、といろんな人と話をするよう、いろんなグループにとびこむよう努力をしていたつもりだ。そうしたことは、努めてもらうしかない。

それから特に男子校育ちの人にみられたのは、変な女のイメージをつくりあげてしまっていること。男はたいがいこうした変なイメージをもっているようだが、それが特に、男ばかりの環境に育って強くあらわれているようだ。女はかわいくあってほしい、あたたかく包みこんでほしい、とか、何しろまともに接した初めての女性で、夢のような存在で、尊敬している、とか、変に理想化して考えている。生身の女はこうじゃないんだから、理想に考えてるようなものとは全くちがう「異性」の人なんだから、現実をみつめてほしい。

男は女と話したりするとき、性的欲求を感じてしまい、それを知性で抑えてやっと耐えているのだから、わかってほしい、と言った人もいた。男は全ての女にそう感じるかもしれないから、もしそうならその点は違うが、女もやはりある種の男に対してはそれは感じる。別に女にだって性欲がないわけではない。

女性は大学の中でどういう位置を占めているのか、どういう目でみられているのか、どうして存在なのか、ということを、自分はこの文の中でいいたかったのだ。それでこういう題名にした。

学生、というとき人が頭にうかべるのは男の学生であり、女は本来学問などするものではない。という固定観念が無意識のうちにはたらいて、女子学生、とか女子大生、とかいう言葉が好んで使われるのだろう。

女は大学の中では、異物のようなもので、一緒の仲間、勉強する競争相手、ではありえないのだろう。男が本気でとりくむ世界に、女は異質な存在、まともな相手ではありえない。飾り物のようにしかみられないのだ。

数が少ないからだけではないだろう。女の数の多い学部や、女子

大などは、結局お人形みたいにみられている。たくさんいようが同じことだ。

「第二の性」ではないが、女が古典的なイメージでとらえられていることは、全く変わりない。

女は常に、主体でなく客体、そして母イメージと娼婦イメージに支配されている。

女は人に気に入られるよう、男に気に入られるように行動するばかりで、自分のために、主体として動くことがない。常に対象物としてしか存在しない。

女は母のようにあたたかく包みこむように、細かく世話をして、やさしくいてほしい。そして女は娼婦として、性的対象物として、美しくあってほしい。そうした母イメージと娼婦イメージに支配され、つくられてしまう。

最後に合コン批判をかこう。

自治会などでも、女子大との合コンをあっせんして、学内の女性の気持ちを完全に無視しているが、いったい何のために合コンをやるのか。他の大学の人と仲よくなるためなら、我々女がよその大学の女や男とやったっていいわけだ。だがそうしたことはめったに行われない。専ら共学大の男と女子大の女とがやっているようだ。

中にはまじめに、人間的なつながりを求めていく人もあるのだろうが、どうも中には、遊びの対象、欲望の対象としてだけで女を求めている男もいるようなので、耐えられない。

ふつうに、ただ仲よくなりたい、という気持ちからするのであっても、なぜ大勢で集団見合いのようにやらなければならないのか。それも、クラスとかクラブとかの単位を利用してするというのもわからない。こういうのは、有志で、というか、やりたい者、気の合った者でするものではないのか。

それからほんとうに最後に。トルコ風呂やピンクサロンやキャバレーで買春行為をするのをやめてほしいのだ。相手が誰でもいい、という男の性欲は自分には理解できないが、それも「こうあらねばならぬ」「強くでなくてはならぬ」と男が抑圧されているからではないか、という気が非常にする。

女は男になかなか本音を出して話せない。売春する女は金で買われているのだから、本当の気持ちなど出せない。そうでない女も、結局今の社会で男が強いのだから、人間と人間として男と接するのは困難になる。

そうした状態はいやだ。一人の人間と一人の人間、という関係を、女とでも男とでも、つくっていけたら、と思う。（79LI）

前号オ6号におきまして、以下の誤字があることが判明致しました。編集部員のボケの為、関係各省庁や住民の皆さまに多大なご迷惑をお掛けしました事を、ここに深くお詫びいたします。

P. ℓ

6－14　処女→処分
11－18　年項→年功
28－17　還起→還帰
32－16　自虐→自虐
43－題字　追う→負う

多謝！

ゴメンナチャーイ

時代錯誤社株式会社

法と社会

杉田敦

最高裁が、政治的影響力の強い諸問題については、「このような問題は裁判所の判断になじまない」といった奇妙なレトリックを弄して、判断を回避している事は周知の通りだが、こうした例を目にするたびに僕は、江戸時代の裁判における一挿話を思い出す。詳しい経緯は失念したが、何らかの悪事をはたらいた父を実の娘が訴え出たところ、お白洲は父の罪を問うより先に娘を責めて、「親に尽くすべき子が、親を訴えるなど言語道断。訴えた事自体罪である。」と言って、この哀れな娘に重罪を課したというのである。父の悪事の反社会性よりも、身分秩序に動揺を与える娘の行ないの「反社会性」の方が高度であると、お白洲が考えた結果がこの判決だったのであろう。この判断は、儒教社会では完全に合理的なものである。およそ正統派儒教（朱子学）が他の諸宗教と根本的に異なるのは、他の諸宗教が、現世を超越した絶対存在を現世の規範として措定しているのに対して、正統派儒教では、現実の社会それ自体が規範となっている点にある。「真正の預言は、『現世』は規範に従って倫理的に形成すべき材料だとし、一つの価値規準にあわせて自己の生活を内側から組織的に方向づけていこうとする、そういった態度をつくりだす事になる。が、儒教のつくりだしたものは、これと正反対に、『現世』の諸条件に対する、つまり外側への順応であった。」というウェーバーの指摘（『儒教と道教』第八章）は、但徠学等の知識の欠如に基くもので、儒教の全体像を正しく把握しているとは言えないが、江戸幕府の正統イデオロギーたる朱子学及びその亜流においては、確かに、ここに言われているような事情があった。そのような社会では、現存する秩序の良否を客観的に判断するための、超越的な理念がないため（神がいないため）、現存する秩序はそれが現存するが故に絶対的な善であると言う事になってしまうのである。そして、これに異を唱える者は、ただちに秩序を乱す者（＝奸）と言う事になる。現存する秩序の他にも、別の形の秩序があり得るし、そちらの秩序の方がよりよいかもしれない。従って改革必らずしも悪ではない、といった相対的な政治観は出て来ないのである。それ故このような社会は、現存する社会のスタビリティーの強化を唯一最大の目標とし、既成秩序の破壊を最大の悪と見做すような、極度に保守的な社会とならざるを得ない。神のいる社会では、罪の概念は社会に対する罪と神に対する罪との競合ないし複合であり、社会的秩序を何ら乱さない行為でも神の名において（あるいは民主主義・社会主義などのイデオロギーの名において）処罰される事がある反面、社会の運動法則を超越したモラルによって、現存する体制の行為に抑圧が加えられることもあるのである。これに対して儒教社会では、超越的モラルへの罪と言う概念は弱く、罪とは取りも直さず社会秩序への挑戦であるとされる。そこで、親を訴えるという娘の反身分秩序的な行為は、それ自体新たな罪を構成し、それは、社会のスタビリティーへの危険性という見地からは、父の犯罪よりも重大であるため、一層悪質と見做されるに至ったのである。現代の最高裁は国民が「お上」を相手どって訴訟をおこしても、さすがに「訴えた事自体罪である」とまでは言わないが、現行選挙制度の是非と言った、政権のあり方にまで発展しかねない問題については、一切判断しようとはしない。違憲立法審査権を、実質的に空文化させているのである。そこには、現存するスタビリティーの保存の方が高い正義の実現よりも望ましいという、儒教社会の思想的伝統が不気味に息づいているのである。

以上述べたようなスタビリティーの保存という概念は、通常は「和」あるいは「人の和」と言った言葉で表現されている。その最もいきいきとした例は、現存する幾つかの新興宗教の教義の中に見出しうるし、それ程顕在化した形ではないにせよ、日常生活の中で屢々口にされ、行動の規範となっていることは容易に観察されるであろう。そこで、ここでは、このような正統的な「和」概念に真向から対立する植木枝盛の「和」・「乱」観について、簡単に紹介してみる事にする。

愛国社再興と国会期成同盟結成との中間期にあたる一八七九年三月に植木が著した『民権自由論』は、短い文章の中に軽妙なユーモアを散り嵌めながら、天賦人権説の要諦を平易に紹介した見事なパンフレットであるが、その第三章で植木は、国の発展の基礎となるべき民権の伸張を嫌う専制政府が、先覚者を弾圧し、国民の議論を抑圧した挙句、「人民猿の如く羊の如く紙鳶の如き有様に至りて、理否も問わず、曲直も論ぜず、政府の法令に屈従して唯々諾々たるの秋に至れば、之を国家能く治まれりと言ひ、太平と称し治平と唱へ天下静かなりと思ふて撃壌鼓腹、之を祝いえを慶び、済まし切って国隆盛なりといたし」ている事をあやしんでいる。そして、「是れはこれ太平でもなく隆盛でもない、実に間違いの親玉で、即ち天下の大乱でござる。元来乱と申すものは、唯剣をひらめかし弾丸を放ってとん〳〵ぺち〳〵戦争のある時のみが乱ではない。（中略）政府は圧制を施して人民を虐げ人民は卑屈にして正理を達する事を得ざる時は、是れ取りも直さずその国の乱にて然も大なる乱なり。一体世の中に正理の行はれざる間は皆乱と知るべし」としているのである。すなわち植木は、スタビリティーの有無としての「和」「乱」にかわって、天賦人権という抽象的規範の実現度いかんとしての「和」「乱」という独自の定義を試みているのである。

植木という人は、直情径行の、どちらかと言えば単純な頭脳の持ち主だったと言われている。この「和」「乱」観にしても、殆んど直観的に捻り出して来たものだろう。しかしながらそこには全ての改革者に必要な、抽象的理念への帰依が僅かに窺われるのである。神（天賦人権思想）が居たからこそ、植木は、朱子学的「和」の呪縛を振り切って、行動を続けて行く事ができたのである。

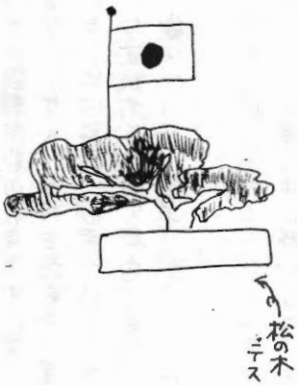
ところで、植木の「和」「乱」観はこのように興味深いものであるが、その影響となると殆んど皆無と言ってよい。自由民権運動が国権化し、敗退して行くにつれ、植木の名前も忘れられて行ったのである。日本社会は、少なくとも江戸時代以来今日まで、基本的には、一貫して「和」の保存を目的とするその社会構造を保って来たのである。戦後、親族法の改正等により、身分秩序が法的に解消し、意識の上でも朱子学の影は払拭されたと考えられているが、果してそうだろうか。確かに日常レヴェルでは消滅している。しかし本質的な構造、つまり先に述べたような、社会それ自体が社会の規範となっているという「和」の論理的循環構造は、一向に衰えないどころか、一層成長して来ているのではないか。

江戸幕府は、「和」の動揺を怖れたが故に自らの手で諸矛盾を解決する事ができないでいた。ところが、「黒船」の登場によって、「和」の論理的循環構造を越えた一つの場（「世界の中の日本」）が設定されると、一挙に政治的リアリズム（それは狙撃学によって準備されていたのだが）が開花し、日本社会は起死回生の大改革に成功したのである。同じ事は一九四五年にも起こった。複雑な指揮系統と、天皇という超論理的機関の存在のために、誰が戦争をやっているのか誰にもわからないという不思議な状態が続いていた。戦争は中止されなければならないと、誰もが考えていたが、現状を打開する事は不可能だった。現状がどんなに矛盾に満ちたものであろうとも、それは現存するが故に「和」である。「和」を批判する事は「乱」と見做されても立句が言えないのであり、自分からすすんで「乱」を為す者（不奸）と呼ばれたいと思う政府首脳は一人も居なかったのである。しかし、この状態も、第二の「黒船」（＝進駐軍）の登場に

よって解消し、その上、農地改革など、日本社会が自発的にする事は不可能であるような、大胆な社会改革が、ジープの威光によって、強行されたのである。幸か不幸か、政治的意味での第三、第四の「黒船」は、まだ来てはいないが、経済的な「黒船」は「ニクソンショック」「石油ショック」などたくさん来ている。そして、そのたびに日本経済は、一時的には辛酸をなめたものの、技術革新等の点で飛躍的に前進したのである。このように、近代日本の重要な改革は、その殆んどが「外圧」(「黒船」)に対する抵抗ないし屈服という形で行なわれている。逆に言えば、「外圧」がない限り、日本社会は自主的な判断で重要な構造改革に着手する事が殆んどないのである。例えば、日本経済の最大の問題である、大企業と中小企業との二重構造という問題については、これまでのところ「外圧」があまり加わっていないため、誰も真剣に解決の方途を探ろうとしない、いや、探ろうとする事ができないのである。

このような日本社会の硬直性は、これまでにも繰り返し述べて来たように、「和」の論理的循環構造に根ざしている。この循環を脱するための一つの手引きとして、植木枝盛の「和」「乱」観は注目に値すると思う。

(78 L I)



発刊に際して

駒場にたたずみ、ふと思う。自分は一体何なんだろう。何故ここにいるのか。駒場ってどんなところだろう。実はこんなあたり前のことを知らないままに我々一人一人は通りすぎていく時に身を浮かべているのではないだろうか。

「自分が身を置いている場所を直視しよう。」ここから恒河沙は出発する。駒場を見つめ、その文化をたとえわずかなものでも、自分自身の基盤として大切にし、ひいては駒場の文化を積極的に形成していこう。これが時代錯誤社に集まった我我の考えである。

もちろん、文化はそこで生活する我々一人一人が支えていくものであり、決して、政治的なアジテーションや、行動によってのみ創り得るものではない。それでいて文化は、それらすべてを包摂し、溶け込ませてしまう総体として存在する。一人一人のささやかな行動、それが実は文化の最大の担い手といえるだろう。

しかし現状を考えると、一部の党派や、大きなサークルを除いて、駒場にいる個人にはコミュニケーションの手段が与えられていない。これでは充実した文化内容は維持出来ないのではないだろうか。恒河沙は駒場の文化を、ひいては、我我の時代の文化を最底辺から支えるものとして、無検閲、無修正を原則としてその誌面を広く公開し、コミュニケーションの中から、新たな文化を建設していきたいと考えている。

(一九七九年一月)

新幹線車内販売体験記 その1

夢野佐理葦

〈動機〉

夏休みに何も生産的なことができなかったことを後悔し、また、いつまでも親のスネばかりかじっていて、アルバイト一つしない自分を反省し、秋休みには集中的にアルバイトをしてみようと思った。どうせやるなら、自分の環境ができるだけ変わるような仕事がいいと思い、車窓から東海道の景色を楽しむこともできる新幹線で働こうと決めた。車内販売なんてウェイトレスとさほど変わらないだろうという甘い考えを、この時はまだ抱いていた。だが、人生経験の一つとして、労働の厳しさを味わってみようという意図もあったことは確かだ。前期試験が終了した時、翌日からの仕事に対し、好奇心をもちつつ期待していた。

〈第一日目〉九月二十六日

日本食堂品川営業所に一時に行き、オレンジ色の制服とクリーム色のサロンとヘアタイ、それに靴と、自分の所持品を入れるバッグを与えられた。バッグには広島宿舎で一泊するためのものを入れた。ロッカー室で着替え、鏡を見ると、それらしく見えたので安心する。点呼の時、同じ班の人(正社員)に「アルバイトの〇〇です」と挨拶するが誰からも返事がなく、チラッと横目で見られただけだ。ちょっと予想していた雰囲気とは違う感じ、急に不安になる。諸注意の後、東京駅行の社員専用バスに乗るのだが、急ぎ足で行く皆の姿を、ほんの一瞬見失ってしまい、行き場がわからずうろうろしていた。「あのー」などというまのびした言葉は決して聞き入れてもらえない。全く無視だ。かろうじて覚えていた一人の顔をみつけてほっとし、「どこへ行けばいいんですか?」と尋ねたが、急ぎ足で素通りされてしまった。どうしようと迷っていると、「バイトさん、こっち、こっち」と促がされた。心を引き締めねば、と自らにいいきかせる。バスの中は静かだった。私は、これから新幹線で広島に行けるという一種遠足のような気分になり、第一京浜から銀座へと続く道路の両側の建物を眺めていた。後から思えば、皆はバスの中で、これから六時間余の楽でない仕事のことを考え、気が重かったのだ。

バスを降りるやいなや東京駅倉庫での検品が始まる。検品とは、販売品の名称と数量を確かめることだ。ここでも私に誰も指示してくれない。「何をやればいいんですか?」と聞くと、面倒臭そうに、ポットをとってくるようにと言われた。初めての私には、倉庫のむっとする厭な臭いと、生温くて湿っぽい空気がとても不快に感じられた。

エレベーターで十七番線ホームに出て、十五時二十四分発ひかり一三九の入線を待つ。ビュフェのある八号車の位置までホームの端から歩くのだが、重い2本のポットとバッグを持っているので一層長い距離に感じられた。ひかりが入ってきてドアがあくとすぐ乗車し、積荷の作業だ。かなりの重量の品物が次々に入れられ、彼女らは逞しくそれを運ぶ。そのスピードといい力強さといい、私は圧倒されてしまった。そして、名称も場所も何ひとつ知らないのに、五

つか六つの仕事を早口で連発銃のように並べたてられて、面食ってしまった。「えっ？」と尋ね返すと、もう一度厳しい口調で言い付けられた。この職場では丁寧な説明などなく、全て叱られながら覚えてゆかねばならないのか、と感じた。後で聞くと、この班は三十班ある中でも特に厳しいので有名だということだった。

十六両編成のひかり号を前半と後半に分け、それぞれ三人位ずつで車内販売をやる。その他、ビュフェのコックと、食堂車担当者が数名いる。私は後半車両の担当だ。

ワゴンに品物を載せる場合も、その並べ方が決まっていて、乗客に見やすいようになっている。もっとも、バイトの私にはワゴンは押させてもらえず、手でお土産品をかかえるか、トレンチ（お盆）でババロアを運ぶか、よくて手鞠でお弁当を売るかである。私がサンドイッチの手籠にお茶を入れていると注意された。お茶はお弁当と一緒に売るもので、サンドイッチにはジュースをつけるのだそうだ。お茶が欲しいお客もいるだろうに、と私は思った。

一通り積み終り、ビュフェの清掃が終ると、やっと販売となる。釣り銭をサロンのポケットに、小銭と紙幣を分けていれて出発だ。確か、既に新横浜を過ぎていたと思う。東京のお土産品である雷おこしと栄太郎飴から売る。ドアが開いて、ずらりと並んだ乗客の顔をみると恥ずかしくなり、なかなか声が出ない。どのような調子で言ったらよいのかも迷ってしまう。思い切って「東京名物の雷おこしと栄太郎飴はいかがですか。」と言ってみた。歩く速度も定まらず、新幹線の揺れも手伝って、自分がとてもぎこちなく動いているように感じられた。一回通してビュフェに戻ると、後ろからついてきた一級さん（班長のような人）から、声が小さく歩くのが遅いと言われた。その後、小田原のかまぼこ、ちくわ、静岡の安倍川餅、わさび漬、名古屋のういろう、京都の八ッ橋、岡山の吉備団子、そして、その間に、アイスクリームとババロア……と、休みなく売らねばならない。私は、ばか正直に、車両と車両の間で休まず歩き続けたため名古屋頃から足の裏が痛くなり、両足に靴ずれを作ってしまった。次の日からは適当に車両間で休むようにしたが……。途中、五時頃だったろうか（時計はしてはいけないので正確にはわからない）車内で食事を出された。ビュフェに客のいない時をみはからい、狭い場所で食べねばならないので、賞味して食べるなどということはとてもできない。

新大阪に着いた頃は、真っ暗だった。秋分も過ぎて、日が短くなったなあと感じた。車窓から夜の闇を眺めるだけで、時間がわからないということは心細いものだ。慣れない仕事で疲れもでてきて、あとどれほど働けばいいのか、そればかり考えるようになった。そして、初心などすっかり忘れてしまい、何故私はこんな事をしなければならないのだろうと思った。

到着の四十分程前から後片付けが始まる。全て手際よく、要領よくやらねばならない。丁寧さ、几帳面さは割愛され、ある程度の大まかさが要求される。残量検査、清掃、ゴミの処理等が主なものだ。ポット洗い（コーヒーが入っていたもの）を丁寧にやっていたら、「ざあっとでいいの。これ見て。」と、清掃用具入れの扉の裏に付着する、たくさんの小さなゴキブリを見せられた。一匹のゴキブリで大騒ぎしていた私は、気分が悪くなり、話に聞いていた汚なさというものを目のあたりに見たと実感した。

二十一時四分、やっと広島についた。長旅だった。ドアが開き、急いで荷をおろす。そして、最後に自分たちの荷物をもってホームに出た時、解放感（空間的にも、気分的にも）のため、頬を撫めてゆく夜風がとても心地よかった。

ポットを倉庫に置いてから、皆より遅れて、駅から歩いて三分位の所にある宿舎に着いた。夕食（仕事の関係で食事の時間がとても不規則になるので、夕方、車中で食べたのが〝昼食〟分なのだそうだ）を食べ終わると、十時近かった。その後入浴を済ませてベッドに腰をおろした時、やっと一日が終わったと思い、深いため息が出

た。寝室は、二段ベッドが三台と、エアコン、それに小さなテーブルが一つ置いてある、ちょっと薄暗い、全く殺風景な部屋だ。皆とテーブルの上のお菓子をつまみながら雑談したが、この時初めて彼女たちから、仕事中の陰険さ、厳しさが消えた。私も精神的緊張を解くことができた。しかし、今まで自分の好きなように気ままな生活をしてきた私にとって、時間的、空間的拘束は苦痛だった。彼女たちは若いのによく耐えていると感心した。一番若い人でも六か月も続けているのだ。私にはこれからの三週間さえ、とても長く感じられたのに……。休みは月六日で、盆も正月もないという。だからある人は年に二回位しか郷里に帰らないという。また、この仕事は足に相当負担がかかる。慣れるまでがたいへんだ。一級さんは両足に、ウオノメと水虫と靴ずれをこしらえて、はれあがった足に薬を塗っていたが、その姿はとても痛々しく、昼間、あれほど何かにつけていちいち叱りつづけていた一級さんが、妙に小さく感じられ、哀感のようなものを漂わせていた。月十万円に満たない給料は、化粧品と衣服と食費で殆んどなくなってしまい、貯金はわずかしかできないという。テレビも見られない彼女たちにとって、情報源となるのは週刊誌ぐらいだ。漫画は読んでも、新聞は殆んど読まない。私がベッドのそばにおいてあった新聞を読もうとした時、「新聞読む暇があったら、ゴミでも捨ててきなさい」と言われた時、情けない気持ちになった。学生である私たちとは、全く別の世界に住んでいる、と感じた。彼女らには、自己の向上とか内面の充実とかは全く無縁だ。日々の仕事をこなしていくのに精一杯で、それ以外のものは、自分に関係するわずかの範囲内でしか知ろうとしない。また、それで十分生きていけるのであり、それ以上のものは必要ではないのだ。彼女たちの生活実感というものが切実に感じられた。学問なんて、本当に〝暇〟がなければできないものだ、と思った。

彼女たちは、こんな味気ない生活に満足しているのだろうか。決してそんなはずはない。話によると、毎年二百人ほど入社する新入社員のうち、半分が一年でやめ、三年勤める人は稀だという。全く納得のゆくことだ。まるで消耗品だと思った。体力的にも相当疲れる仕事だし、上の人から何かと〝イビラレル〟のに耐えられないのだろう。ベッドの横の壁には、それを如実に示す落書がたくさんあった。壁は毎年新しく塗り変えられるのだろう。書かれた日付をみると、皆今年のものだった。でも、この会社内に根強くはびこる陰険な体質というものが受け継がれていく限り（私には、昔の嫁と姑の関係の繰り返しと同様なものに思われる。）、いくら消しても、落書は決して消えないだろうと思った。上の人に対する怨恨の言葉が殆んどだが、中にはほほえましい愛の詩などもあり、救われる気分だった。日本食堂の管理職の人達は、この実態をどれほど知っているのだろう。もう少し彼女らの身になって、少しでも働き易い職場にするよう改善しようとする気持ちをもってほしいと思った。一年で半分がやめるということを何年も繰り返しても平気で、一向に改善策を講じないというのは異常だ。絶対間違っている。

私は、ひとりベッドに横たわり、遠い広島で孤独な夜を過ごすと思うと感傷的な気分になり、何故か、女工哀史や路傍の石を思い出していた。

〈第二日目〉

翌朝は七時に起床し、朝食後点呼があり、九時十六分発ひかり号の入線を待った。前日の疲れから、体中の筋肉が痛い。腕には知らないうちに、アザがいくつもできていた。足にもできている。

二日目なので仕事には幾分慣れた。でも、上の人たちは、決して休ませないように何やかやと用を言いつける。食堂長は、中年の男性であるにもかかわらず、つまらぬことにもいちいち注意をとばした。陰では食堂長をもじって〝極道長〟と言われているのもうなずけた。

このような仕事で嬉しい時というのは、やはり品物が売れた時だ。

ハッ橋と安倍川餅を全部売り切った時、嬉しくて一級さんに「全部売れました」と報告したが、「まだ残っているでしょ。支店に飾ってあるのが。それが売れたらA車（前半車両の班のこと）に報告しなくちゃ駄目でしょ。」と、ニコリともせずに言われた。せっかくたくさん売ったのに、まるで悪い事をしたように言われたので少々頭に来た。でも口答えは禁物だ。例え自分が正しくても、それを通そうとすると必ず抑えこまれる。道理は通らないのだ。憤懣はぐっとこらえなければならない。しかし、販売意欲を失わせてしまうような言葉は考えてしまう。能力給などもらえない彼女らは、いったい何を励みとしてこの仕事をしているのだろう。上の人たちや、ましてや会社の管理職の人などに訴える術をしらない彼女らは、その不満を就寝前の雑談の時と、ベッドの横の壁にはきだすのだ。どんな職場にも大なり小なり人間関係の難しさはつきものだが、それを初めて経験した私は、学生時代が最高に楽しいのかなあと思った。このような職場では、上の人の言うことを何でも素直そうに受けいれ、明るく、憎めないように振る舞っていれば、すいすいと泳いでゆけるのだろうが、そんなことは私には、少くとも今の私には到底できない。不自然過ぎる。どうせ三週間限りなんだ、という"甘え"が何度も頭の中をよぎった。

下りと違って上りは、駅と駅の間隔も短く感じられる。昼間であるので、気分的にも明るくなるからだろうか。東京に近くなるという喜びのためだろうか。

新幹線はたくさんのトンネルをくぐる。また、さほど離れていない所でも天気はまるで違うこともある。東海地方で集中豪雨に会い、止まるかと思われたが（新幹線は、よく止まるのだ）大丈夫だった。東京に近づくにつれ雨も小やみになっていった。

十四時五十六分に東京駅着。荷物を降ろしてバスにのる。座席に座るとすぐ心地よい眠気に襲われ、うとうととしてしまった。バスの適当な揺れが一層眠気を誘い、このままずっと揺られていればよいと思った。精神的緊張が本当に弛緩するのは、この帰りのバスの中と、就寝前だけだ。でも、期待に反してバスはすぐ品川営業所に着いてしまった。

降りてから残量報告や、売り上げ伝票報告など、事務的なことを済ませて、やっと解散した。長い二日間だった。下宿までの電車の中でも眠り、家について着替えるのももどかしいほどにすぐ眠ってしまった。夕食前の二時間ほど、夢一つ見ず熟睡した。（54 L Ⅲ）

広告欄

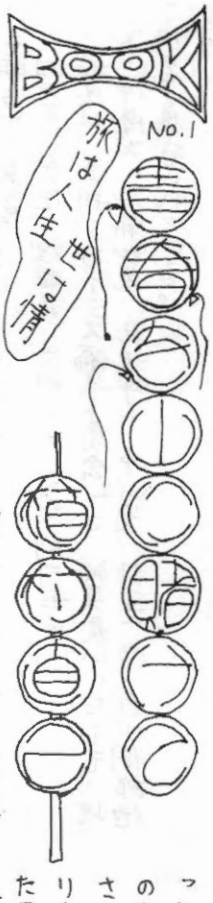
花物語 エリカ狂詩編

ヒニしえの
母なる核を求めて

劇団パラダイス・駒場祭公演

11/23（金） 開場 PM 4:30
24（土） 〃 PM 0:00
25（日） 〃 PM 3:00

入場無料・カンパ大歓迎



兎に角、面白い本だ。夏休みにふと生協で買い、ベッドの上に寝ころびながら読んだが、どんどんページが進んでいってしまった。勢い余って「極北に駆ける」「北極圏一万二千キロ」（同著文春文庫）も続けて読んでしまったくらいである。この「青春…」の本は彼植村直己が大学を卒業してから五大陸の最高峰（エベレスト、キリマンジャロ、マッターホルン、マッキンレー、アコンカグア）をエベレスト以外はすべて単独行で踏破するまでの記録である。登山に興味のない人は「何だ山の話か」と思うやも知れない。だが、この本の面白さは山の話以外の所にあるのである。小生は山歩きを趣味とする者であるが、山の話はさほど面白いとは思われなかった。

では何が面白いのか。それはサブタイトルにも書いて掲げたように、旅と人の情である。植村さんのこの6年間の世界各地への流浪の旅はひたすら山へ登らんが為であったのだが、その旅の中その土地〳〵の人々と、殆ど言葉も通じない中、心と心をふれあわせて行くのである。明大卒後、アルプスに惹かれて資金かせぎの為に渡米する時、彼は英語もろくにしゃべれなかったのである。しかしこの本の中で彼が口と体で喋った言葉は、英語、仏語、ヒマラヤのシェルパ族の言葉、ケニアの言葉、スペイン語などに及ぶのである。つまりこれらの言葉を話す人々と心をふれあわせてきたのである。カルフォルニアの農場で仲良くなった、ヒッピとバストの大きいインディアンの娘さん、アルプスのスキー場でスキーもできない彼をバイトに雇ってくれ、その後も実の親のように面倒をみてくれた、元冬期五輪ゴールドメダリスト、ジャン・バルネ氏、そのスキー場で彼に思いを寄せたジョエル、ケニア山とキリマンジャロに登りに行った時ガイドをしてくれたジョン君、明日は危々危険なジャングルの中へという前夜彼を男にしてくれたナンユキという町の黒人の娘さん、バスの中で片言を交したフサイ族、アンデスへの船の中で知り合った修道女アナ・マリア、アマゾン筏下りで世話を焼いてくれた日系人の三宅さん、ヒマラヤで越冬した時一緒に暮したシェルパ族の人たち。皆んな懐しい人たちである。

故郷を離れ流浪しているという境涯が、このように人間同士を親密に結びつけるのかも知れない。東京の満員電車で中年のオッサンの暗ぎった顔なんぞが目の前に押しつけられてくると思わず顔を背けてしまうものだが何たる違いだろう。東京の人ゴミにうんざりし、満員電車でクタクタになり、車の排気ガスに思わず口を曲ってしまうような生活の中では、すべてのものに「あっち行け」と言いたくなる。だが植村さんの旅は違う。人も山も街もふるさとも、すべてをなつかしみ、それらに近づき、親しく交わろうとしているのだ。ケニア山の頂から見下した、獣の恐怖に脅えながら通過したジャングルの樹海も、カルフォルニアの農場も、アルプスのスキー場も、旅の中で心ふれあわせてきた人たちも、ふる里の父や母もみな懐しく愛すべき存在なのだ。続編とも言える「極北に駆ける」ではエスキモーの老夫婦と親子の契りさえ結んでいる。植村さんが犬橇の旅に出る時、涙で見送ってくれた義母の姿は心に残った。すべての物が懐しく感じられるのは旅を続ける人の常なのか。日常性の中に定住する我々にとって、生活の中で旅の心境を感じるという事は不可能なことなのだろうか。

人生はよく旅にたとえられるが、今は世間全体が、人生は自分の所与の場所に定住する事になってしまっている。そんな世の中に住んでいると、人生が旅なのではなく旅が即ち人生となっている植村さんの生き方は、懐しさの感覚を思い出させてくれるし、我々が、一歩踏み出すの支勇気づけてもくれる。

（gue）

《文春文庫・260円》

BOOK No.2

『季刊クライシス』

「近代の総体が、いまや袋小路に達し（略）人間と人間の関係、人間と自然との関係の総体において、人類はいまや、破滅か、再生か、を刻々と迫られている。ここに岐れ道としてのクライシスがある」という人類史的危機意識に立って「なによりもまず現状を根底的に批判」し「危機を克服すべき人民の自立と解放の座標軸（アリカ）を、人民自身の実践的創造に学びながらともに共同で探求する。（略）マルクス主義と社会主義をふくめて、一切の思想・理論・文化を生きている人民の歴史的現在に照らして、徹底的に検証し、総括しながら、これまでにもまして旗幟鮮明に人民の主体的解放の立場に立つ。」（「季刊クライシスを創刊するにあたって」より引用）

右の辞が、全く縁遠い、大げさなものとうつる向きもあるかもしれない。だが、一見平和で、特に押しつけられる価値もなく（少くともそうは感じられず）、物質的には一応豊かな状況の中で生活をエンジョイしきっている人でも、少しは〝現代人の不安〟めいたことを感じたりすることもあろう。新聞を読んでいるだけでも、スリーマイル島で原発の事故が起こったことや、インドシナの方では船に乗った難民が生死の線上をさまよっていることくらいは情報として入ってくる。また人間解放を理念とした社会主義も、かつてのようにそれだけでバンザイとだけ言っているわけにはいかないことは、中越紛争や、中国における近代化路線の模索を一瞥するだけでも明らかである。

『歴史・文化・理論誌　季刊クライシス創刊号』

編集は「季刊クライシス編集委員会」で、編集長いいだもも、以下、伊藤誠、沖浦和光、北沢洋子、中山茂、針生一郎、森田桐郎他19名で構成されている。

創刊号は「総特集　二〇世紀―人類史の現在」と銘うって、沖浦和光「人類史において〈近代〉とは何であったか」及び野間宏といいだももの対談「人類史におけるクライシスとしての現在」の2つを巻頭に掲げ、伊藤誠、P.スウィージーらによる経済理論的な立場からの諸論文、大内力、いいだももらによる中国社会主義関係の諸論文、その他新崎盛暉「ヤマトと向き合う島社会―琉球孤通信1」、柴谷篤弘「わたしにとって科学とは何か」などが並び、その間に宇沢弘文、北沢洋子らによる短い文章がほどこされているという構成になっている。巻頭の沖浦論文は、人類史を概観しながら「近代」の意味を問い、「クライシス」の内実をかなり明確に描いている。また、単なる問題提起にとどまらず、これからの人類の進路を不十分ながら示していて、この雑誌の基本的立場を知るためにも一読をすすめたい。

もう一つ注目すべきことは、読者に対し強く参加を求めている点だ。投稿は、老若男女、専門・素人、学歴・世間歴、国籍等は一切問わないとし、また、文章以外の写真等による表現方法も歓迎するとしている。さらに投稿参加のみならず、編集委員会のメンバーが、学習会やシンポジウムなどにも協力するということである。装丁が、ややミーハー的（趣味は悪くはないと思う）なのも、誰にでも開かれたとっつきやすい雑誌を、という意図の現われかもしれない。

原稿〆切り間際に入手したため個々の論文に関するコメントは出来ないが、創刊の意図とその方法は、現在の混沌とした社会＝歴史状況と、その反映である理論面での混迷に一石を投ずるものとなる可能性を感じさせる。

なお次号の特集は「文化・非文化・反文化」。

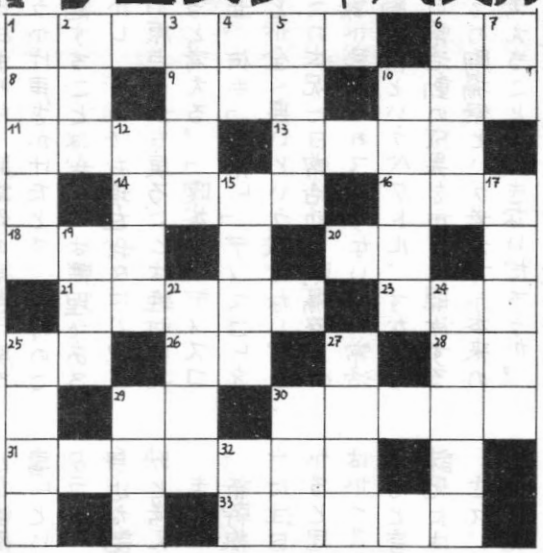
【酔】

〔社会評論社刊・870円〕

今回はぐっとやさしい!

奇怪クロスワードパズル

奇怪 ← 奇怪でもない。 ← 奇怪それほど



ACROSS

- 1 東大の象徴
- 6 肥料の三大要素の一つ
- 8 自然科学
- 9 司馬遼太郎＋中村梅之助
- 10 ワサビ
- 11 おそと
- 13 手あたりしだい一日3冊
- 14 大熊猫
- 16 新幹線の佐理葦ちゃん
- 18 アフォリズム
- 20 ロンドン
- 21 ドッポ関係
- 23 IMF
- 25 ゴカイ,イトミミズ
- 26 ドル,ポンド,マルク,フラン(……)
- 28 個人としての自我
- 29 桃太郎
- 30 耕作形態の一種
- 31 無地の紙
- 33 ゲティスバーク

DOWN

- 1 3180m
- 2 そら
- 3 麻薬の一種
- 4 Between mouse and tiger
- 5 欲のきわめてふかいこと
- 6 糸で操る装置,転じてしかけ
- 7 年二回のおまけ
- 10 機械の働きの度合を表わす数字
- 12 東京ボン太
- 15 ユートピア
- 17 夏のスモッグ
- 19 戦争
- 22 「何をなすべきか」
- 24 きょろきょろするだけ
- 25 日本の喜劇王
- 27 ウシ科のシカ
- 29 おぎゃあ
- 30 まち
- 32 よじること

解答は、P.55の解答用紙に書いて下記宛に11月10日までにお送り下さい。

3等 恒河沙8号(5名)

2等 シャープペンシル(1名)

1等 パーカーボールペン(1名)

正解者の中から抽選で7名様に豪華賞品が当る?

〒176 練馬区練馬4-1-18 小山方 時代錯誤社

編集後記

秋休みも明け、駒場のキャンパスでは駒場祭へ向けて人々の動きが活発になり始めた。駒場祭は、今年で三十回を迎える。三十年前といえば、戦後の動乱期、我々学生の殆んどはまだ生まれていない、我々の両親達が一日一日をまさに必死に生きていた時代である。そうした時期に駒場祭は生まれた。駒場祭の原点に戻ろうというかけ声をかけたとて、当時のことを実感することは我々には無理であろう。しかし、それでも現在我々にとって駒場祭の原点に立ち戻ることは絶対に必要であると考える。「喫茶」「ディスコ」の濫立。何も「喫茶」「ディスコ」をやることが全く悪いという気はない。しかし、この状況に日常活動と駒場祭との逆転現象が感じられてならない。日常活動→駒場祭というベクトル、すなわち学生の日常活動の成果を市民に開放する場としての駒場祭という考え方が本来のものと考えることはできないだろうか。ところが現状を見つめれば、駒場祭あっての日常活動(少々極端な言い方かもしれないが)という図式が浮かび上がってこないだろうか。こういう状況には是非とも楔を打ち込まねばなるまい。今号の「駒場祭特集」はこうした点を突いたものとは決して思えないが、そうした方向性を意識して企画したものということを考えて読んで頂ければ幸いである。

ところで、先号の売れ行きはドッボであった(社員からの搾取が一層激しくなった。社長K死ね! 時錯労組)が、その原因はどうも内容の硬さにあったらしい。そこで今号では硬さを廃して、身近な話題を追求するということで、「落書」というものを取り上げてみた。「クダラン」と思われるかもしれないが、「身近な話題を」という真面目な意図の反映と考えて頂きたい。

また、『恒河沙』としては異例の原稿「新幹線車内販売体験記」(夢野佐理)に注目してほしい。読んで頂ければわかると思うが、これは『恒河沙』誌上ではかつてない程、実感がこもったものであると言っても過言ではあるまい。読者諸兄には、是非とも一読を促したい。

さて、最後に、私事で恐縮ではあるが、筆者は先日見事に女房に逃げられて、みじめにも一歳の息子と二人暮らしである。毎晩一杯やりながら、息子の寝顔を見る度に、母を失なった息子が不憫に思えてならない。重労働低賃金に苦しむ父としては、息子にだけは幸せな人生を送ってほしい。まだ遅くはない、亜紀子よ、戻ってきておくれ! 【蓮】

恒河沙 こうかしゃ No.7

定価 160 yen

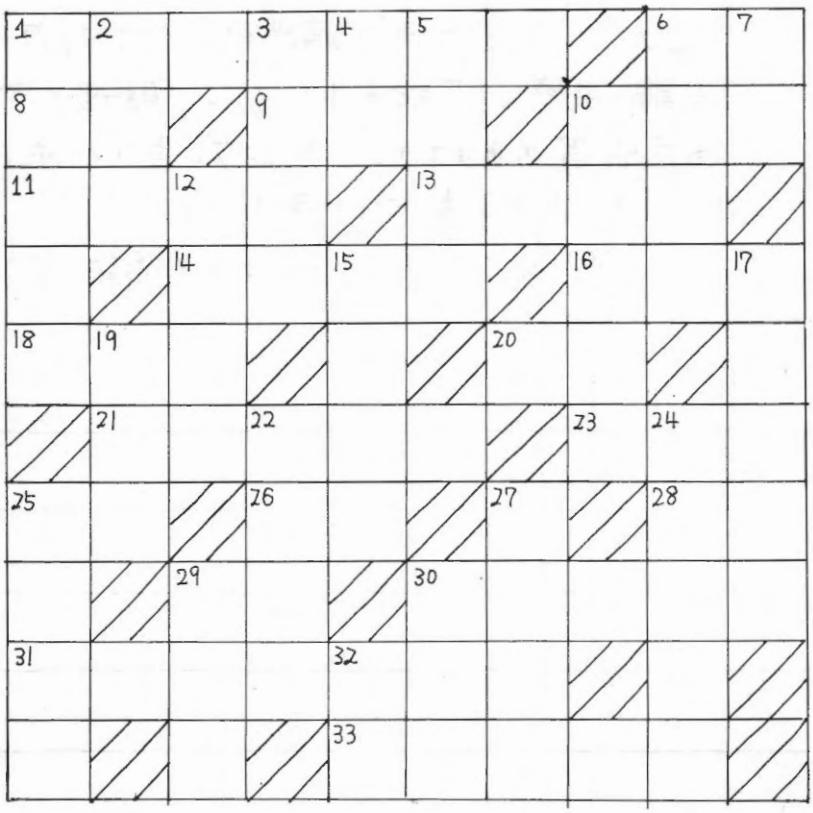
1979年10月20日発行(第1刷)

編集発行:時代錯誤社
(〒176 練馬区練馬 4-1-18 小山方)

印刷所 :ギンショウ

ナマモノデスノデオ早目ニオ読ミ下サイ。乱丁落丁はお取り替えします。

クロスワードパズル 解答用紙



誠に恐れ入りますが このページを切取って封筒に入れてお送り下さい。(諸物価値上がりの折、切手代50円は誠に心苦しいのですがどうぞお願いいたします。)

アンケートにお答え下さい

1、今号の記事で面白かったものは？

a 駒場祭　b パラレルワールド　c ある対話　d 愚者の夜

e コラム「時代錯誤家」　f. JOHDAN　g 落書　h テニスを考える

i 僕は日大生　j 陳さんを救う会　k 女子大生に――　l 和と日本社会

m 新幹線体験記　n, Book Review　o クロスワード

2、何号をお読みですか　1、2、3、4、5、6

3　既刊の恒河沙で特に面白かった記事は（　　）

4　恒河沙の内容は硬いか柔かいか　1 硬い　2 柔かい

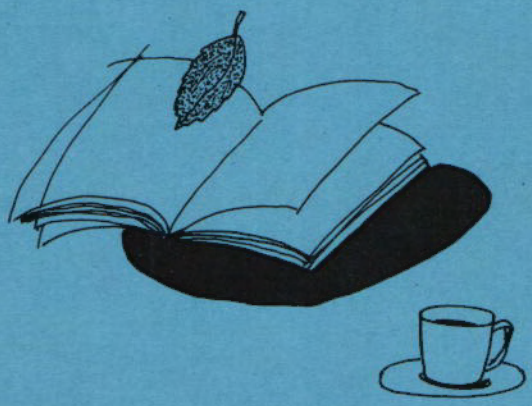
5　恒河沙の値段は　1 安い　2 丁度よい　3 高い

解答の送り先は　（11月10日まで）

〒176

練馬区練馬4－1－18 小山方 時代錯誤社

（このページには時代錯誤社への文句，原稿への反論・共感，「おくれあげる」，「駒場の黒板」への広告等お書き下さい。黒インクで書いていただくとカットもそのまま載せられます。）

（注）裏のクロスワードパズルとは関係なくどうぞ。

御住所　　御名前